登場人物
絵里子・・・美人でプライドが高く、ごう慢な性格で何不自由なく育ったお嬢様。
優雅な暮らしをしているセレブ夫人である。
娘が同級生に対して酷い苛めをしているが、世間体から見てみぬ
ふりをしている。

由香里・・・娘がイジメを受け傷ついている事を、親の絵里子に直接相談するも、
「苛められる方に原因」があると、全く取り合ってくれない。
それどころか、由香里自身の生い立ち・水商売の仕事の事などを持ち出し、
「親のだらしなさが原因」と攻めたてられる。
絵里子に激しい恨みを持ち、友人である真理に協力してもらい復讐を
計画する。

真理・・・由香里とは水商売の仕事で知り合った親友。SM クラブで働いている。
絵里子への復讐を積極的に手伝うのは、元来サディズムの傾向が強い
ためである。育ちの良い美人セレブが、屈辱でボロボロになり、泣き崩れてゆく様に興味を持っている。

私の名前は絵里子、セレブ婦人で何不自由ない生活を送っていましたが、ある事を切っ掛けに転落してしまいました。
それは娘の美香が同級性に酷い虐めをしていた事から始まりました。
娘のイジメの事は私も気付いていましたが、虐められている子の親が水商売のシングルマザーという事の見下しと、自分の娘がイジメをしているなど体裁が悪く認める事など出来ず、見て見ぬふりをしていました。
ちなみに私達、親子は芸能人並の美貌ですが、その事が人を見下す強慢な生き方に繋がったのかもしれません。

「奥様、人様の娘を一年近く虐めて、それで済むと思っているの」

由香里は虐めの音声・映像を証拠に「裁判」と絵理子を脅しにかかり、誠意ある
謝罪を要求してきたが、人生の中で謝罪など殆ど経験がない絵理子は屈辱から胸が
張り裂けそうであった。
しかし、世間体を人一倍、気にする絵理子は、そのまま無視する事も出来ず
とりあえずは形だけの謝罪を行い、示談で解決しようと申し出るのであった。

「迷惑料としてお金を払うわ。それでいいでしょ」

「私の娘を一年近く虐めて、金で解決ね。そんなもので済む訳ないでしょ」

呼び出されたのは、あるホテルの一室であり、最上階の防音完備の部屋であった。
絵理子がその部屋に入り由香里と押し問答を繰り返して数分後、突然ホテルのドアが開き、
同年代と思われる女性がヌーっと不気味に入り込んできた。

「だ、、だ、誰よーー」

「私の友達の真理よ。ウフフ、、今日は奥様の謝罪に立ち会ってもらう事にしたのよ」

「奥様、よろしくね。由香里とは昔からの付き合いなのよ。お互い、夜の仕事でね、、
ウッフフ、まあ私は風俗嬢だけどね」

「なんなのよ、あなた。由香里さん、どうゆう事。私とあなたの話でしょう」

「いいじゃないの。私の友達よ。あなたの誠意ある謝罪を一緒に確認してもらう
パートナーよ」

「出ていってよ。何が風俗嬢よ。そんな人と一緒の空間にいたくないわーー」

「奥様、そんなに私の事を嫌わなくてもいいじゃないの。初対面だし、お互い
何もわからないでしょう。見た目だけで嫌うのは偏見よ」

「育ちの良い奥様からしてみれば、私達の人生なんて考えられないでしょうね。
いつか水商売の事をバカにした事があったわね。「そんな仕事をしているなら
苛められても仕方ない」ってね」

「あら、酷いわね。そんな事を言ったの、絵里子さんわ。今日はきちんと謝らないとね。
今まで、好き勝ってさぞ贅沢をして生きてきたんでしょ。そんな、ごう慢な人生に
対しても、謝罪しないとね」

「ごう慢な人生」それは言い掛かりなどではなく図星であった。財・名誉・美貌
これでだけの条件が揃い、しかも幼い頃から我がまま放題に育った絵里子には、まともな

道徳観は欠落していた。自分よりも下と思う物には容赦ぜず、また自分より秀でた物にはあらゆる手段で陥れる。そんな事を繰り返してきた絵里子に、謝罪など考えられない行為であった。

「ごう慢ですって。そんな事はあなた達に関係ないわ」

「あら、関係あるわよ。それが原因で娘もろくに躾けられない、だらしない親に育ったんでしょ」

「だ、、だらしない、、ですって、、、誰に向かって」

絵理子にとって由香里の存在は自分とは比べ物にならない底辺の人間、住む世界が別次元など、自分勝手な差別感で馬鹿にしてきた人物である。つい昨日まではそんな関係であり、その立場は絶対だと認識していたが、それが娘のイジメが原因により突然、一変してしまうなど今だに納得出来ずにいた。

「ふん、何よ、その態度。誰に向かってって、あんたに決まっているでしょ。絵理子さん、裁判の事を忘れないでね」

「ちょっと待って。子供の問題の事で裁判なんて大袈裟だし、その事でバカにされる筋合いはないわ。いくら何でも言い過ぎよ」

「女の子の苛めですってーーー、、あんたねえ、私の娘がどれだけの思いをして過ごしてきたか分かっているの」

突然、由香里が激しく感情的に喋りだす。その形相に驚く絵里子であったが自分よりも下に見ていた水商売の女から、罵声を浴びせられた事が許せなかった。

「待ってよ。確かに苛めた事は認めるわ。でもそれは苛められる本人にも、親にも問題があるはずよ。その事は由香里さんも認めてよ」

「あきれたわ。こんな親がいるかしら。あなた、今日はここに謝りにきたのよね。全然、謝罪の言葉が無いけど、どうゆうつもり。こっちには証拠の映像や音声もあるのよ」

その言葉は頭に血が登った絵里子を冷静にさせる。確かに裁判となればいろいろと

面倒な事になる。ここは屈辱にまみれても大人しく従う事が正しい選択であると
再認識するのであった。

「分かったわよ。謝ればいいんでしょ。それで満足するのならそうするわよ」

「それが物を頼むときの態度かしら。あなたは本当に常識っていうものが
分かっていないわね」

「娘には注意するわ。今後はイジメなんてしないように躾けるわ。だからそれで許して」

絵里子にとっては精一杯の謝罪であった。他人に「許して」など、そんな事を言ったことは過去数十年、記憶にない。

「それで終わり。謝って済む問題」

「あ、、あなたが謝れって言ったのに、、一体、どうすればいいのよ。何をすれば許してくれるの」

「そうね、奥様にイジメがどれだけ残酷で辛いものか経験してもらいましょうか。あなたが謝罪したところで、本心じゃないのは見え見えだし、今後の事も考えると、まずはイジメの恐怖や屈辱がどれ程のものか、分かって頂いたほうがいいわね」

「意味が分からないわ。もう回りくどい言い回しはいいわ。結局、お金でしょ。金がほしのよね」

「金、金って、あんたいい加減にしなさいよ。そんなもので解決出来ると思っているの」

「一体、なんなの。さっきから全く話が見えないわ。私をどうしたいのよ」

「だからイジメよ、イジメ。ウフフ、、、」

「、、、いいわよ。よく意味がわからないけど、気か済むようにすればいいわ。
どうせ子供染みた事で最後はお金の話になるんでしょう」

「あら、いい覚悟ね、奥様。その言葉、忘れないでね。
まあ親が責任とるのは当たり前だけどね」

「ねえ、あなた私の娘がどんなイジメを受けてきたか知っている。奥様の娘から
聞いているかしら。あなたの娘は極悪よ」

「それは娘からも聞いたわ。確かし、酷いことをしたと思うわ。だから、親の私が
こうやって出向いて謝罪をしているのよ」

「私の娘は数々の苛めが原因でトラウマになって、今でも忘れられずに
苦しんでいるのよ。ねえ、絵理子さん、あなたの娘がどんなイジメをしてきたか
知っているの」

「由香里さん、その話はもう分かったわ。もう充分よ。私の娘に限って、そんな事を
していたなんて、今でも信じられないのよ。これ以上は聞きたくないわ」

「なに言っての。あんたどうゆう神経しているの。頭おかしいんじゃないの。
あんたみたいなバカな母親はいるから、世の中からイジメがなくならないのよ。
私に限ってって、勘違いした親バカがよく言う言葉じゃないの。あんたの都合で
話をしている訳じゃないのよ」

「な、、なんですってーー、、ば、ば、、バカですってーーーー」

自分よりも立場の低い女達に好き放題言われるなど、今まで我侭に育ち自分の主張を通し
てきた絵理子にとっては、生まれて初めて経験する程の屈辱であった。

「ねえ、少しは口の聞き方に気を付けてよ。イジメ事以外で責められる筋合いはないわ。
それに所詮は女の子のした事だし、もう済んだ事じゃないの」

「済んだ事ですってーー、、ふん、、娘にどうゆう躾をしているのよ。絵理子さん、あなた
最低な親子ね。何がセレブ夫人よ、バッカじゃないの」

「だ、、誰に言っているのよ、、由香里さん、あなたにバカなんて言われる筋合いはないわ」

「あら、バカにバカって言ってなにが悪いの。人様に迷惑を掛けているのに、
偉そうな態度ばかりとって、裁判されたら困るんでしょ。もす少し私の機嫌をとるような
物言いが出来ないの」

「ねえ、由香里さん。裁判をする事を脅しに使っているけど、所詮は子供染みた悪戯よ。
たとえ本当に訴えたとしてそれが認められても、大した罪にもならないわ。
そんな事をするよりは、、、」

「アンタ、ふざけんじゃないわよーー」

絵里子が喋り終わらない内に、由香里は凄まじい形相で怒鳴りつける。
絵理子は一瞬圧倒されたが、表には出さず冷静さを崩さずに坦々と会話を続ける。

「なに大声だしているのよ。子供のケンカじゃないんだから、もう少し冷静に話が
出来ないの。」

「奥様、子供に変わってあなたが謝るのね。責任は全て、あなたがとるのよね。
それでいいのね」

「いいわよ。それは当然よ。で、いくらなの。証拠となる物を全て買い取らせてよ」

「誰がお金のことを言ったのかしら。そんなもので解決出来ると思っているの」

「そうよ、なにが買い取らせてよ。この女、証拠隠滅を図ろうとしているわ」

「何を言っているのよ。お金じゃないならな、何をするのよ。
どうすれば満足してもらえるの。私も暇じゃないんだから、さっさと言いなさいよーー」

「そうね〜、、土下座でもしてもらおうかな」

「なんですって」

「土下座よ、土下座。勘違いしたセレブが屈辱にまみれながら、謝る姿って絵になるわ」

絵里子は、他人にそんな謝り方をした経験は一度もなく、受け入れられるはずはなかった。
またその相手が由香里など、プライドの高い絵理子にとっては、耐え難い屈辱であった。

「で、、で、出来るわけないでしょ。そんな事。冗談じゃないわーー」

「あら、いいの。そんな事を言って」

「そうよ、裁判するわよ」

「ねえ、裁判っていうけど、そんな簡単なものじゃないわ。
時間も掛かるし、あなた達が持っている証拠だって、どこまで通用するかは分からないわよ。それにイジメをビデオに撮る事は、盗撮まではいかなくても、撮影した方も犯罪になる事もあるし、証拠能力としては認められない可能性もあるわ。
高額な費用も自分持ちだし、ここはお互い示談で解決した方が賢いわ。だから子供染みた事は言わずに、お金で解決させて」

「流石、セレブの奥様ね。なかなかのインテリぶりね。でも私達は土下座して謝って
ほしいわ」

「お断りするわ、そんな事。いじめ位の事で、あなたにそこまでする必要はないわ。
ねえ、事は未成年のイジメよ。たとえ裁判で勝っても大した罪にはならないし、、私も
そんな事に時間を使いたくないし、何より世間体の問題があるわ。私の言う通りにしたほうが利口よ」

絵理子は勝ち誇った表情で、由香里・真理を見下す。

「絵理子さん、私もイヤよ。お金だなんて、そんな物で解決させないわ。
あなたには心の底から謝ってもらうまで、裁判でも何でもするわよ」

「あなた本気で言っているの。私は別にいいのよーー、、裁判になっても負ける気はしないわよ。お金も掛かるし、あなた達、社会性の低い立場の人間よりも、私のほうが信用されて有利になる事は明らかよ。だから私の言う通りにして示談で納得しなさいよ」

口調が変わり、強気な態度にでた絵理子であった。心の中では、この件については
既に決着し「勝った」と確信していたためであった。

「酷いわね、私達は社会性が低いんだ。へえーー、、あんた何様のつもりよ」

「本当の事を言ったまでよ、どうするのよ。示談するの、しないの」

「そうね、いいわよ。示談にしましょう」

その言葉に内心、ほっとする絵理子であった。本当に裁判となれば、面倒な上、
世間体も悪く、又、娘の進学にも影響するかもしれない。
さっきは脅しの為、強気の態度にでたが、絵理子の本音としては裁判だけは何としても
避け、示談で解決をしたかった。

「全く最初から、そうゆう態度で話をすればいいのに、大袈裟に裁判だなんて。
金額は弁護士と相談して決めるけど、あなたの要求に充分に答えられる位の金額を
出す事は約束するわ。それで満足でしょう」

「私の要求に答えてくれるの。それは嬉しいわ〜〜、、絵理子さん優しいのね」

「それは私の娘がイジメをした事が原因だもの。でも、もう二度と、脅しなんてかけない
でよ」

「ええ、わかったわ」

「それじゃあ、示談成立ね。で、、どのくらいの金額なら満足なのかしら。
　一応、聞いておくわ」

由香里の了承を得られた事に内心ホっとする絵理子は、気が変わらない内に
交渉を進め、具体的な金額の話から由香里が提示し額の上目を支払えば
後腐れなく綺麗に事を解決出来ると考える。

「そうね〜、ウフフ、、どうしようかな〜〜、」

「ワザとらしいわよ。そんな勿体ぶって。あなたのお願いを聞いてあげるのよ。
そんな事、最初で最後なんだから、私の気が変わらない内にさっさと言いなさいよ」

「そう、じゃあ、遠慮なく。ウフフ、、」

「まったく最初からそうゆう態度に出ていればいいの。散々意味が分か
らない事を言っていたけど、結局お金でしょう」

上から目線の絵理子に対して由香里はうっすらと笑みを浮かべ、はっきとした
口調で「ウンコよ」っと一言を発した。

「、、はあ、、、」

突然の由香里の発言に唖然とし、開いた口がふさがらない絵理子であった。

「え、なに。なに、なんて言ったの、、」

「あら聞こえなかった。ウンコよ。ウンコ」

「はあーー、、何を言っているの」

「あら、示談で解決したいんでしょう。私のお願いを聞いてくれるのよね。迷惑掛けて、申し訳ないと思っているのよね。だったら私の前でウンコしなさい」

突然の事に唖然とし開いた口が塞がらない絵理子は、今だにその言葉が信じられない。

「全くもって意味がわからないわ。どうゆうつもりよーー」

「絵理子さん、私の娘が受けたイジメの中でね、これだけは絶対に許せないって事が何個かあるわ。それをね、あなたに全部経験させてあげたいの。それが私の望みよ」

「だからって、、なんで私がそんな事をしなければいけないのよ」

「あら、絵理子さんは自分の娘がしてきた苛めの事を把握していないのね。
私の娘はね、下剤を無理矢理飲まされて、人前で排便させられた事があるの。
ねえ、これが女の子の苛めで済まされる事なの。ウンコよ、ウンコ。
まずのその仕返しとして、親のあなたに人前で排便してもらって、どれだけ屈辱を
感じるのかを経験して頂くわ」

「あなた正気なの。いい大人が、何を言っているのよ。下品な冗談はその位でやめて、
さっさと本題に入りなさいよ」

「冗談じゃないのよ。お金なんてもらうより、今までお高くとまって人を見下していた
セレブ婦人が、私の目の前でブリブリとウンコする姿を見るほうが面白いわ。
アハハ、、」

「ふ、、ふざけないで。呆れたわ。いい加減にしなさいよーー」

「それはこっちのセリフよ。人の人生を変えるようなイジメをしておいて、何が
金よ。そんな人の道を外れた女には人の痛みを教えてあげるわ。
娘がショックを受けて今だにトラウマになっているイジメを、あたなにも経験させてあげるわ。それがどれだけ辛い事か身をもって思い知りなさい」

「な、、なにを、、言って、、あなた、、そんな事、、いい大人が、本気で言っているの」

「さっき子供染みた苛め位、なんとも無いって言ったわよね。だったら出来るでしょ。
　早くウンコしなさいよ」

「ちょっと、待ちなさいよ。そんな事、そんなバカな事、出来るわけないでしょーー、、、」

「あら、おかしな事を言う人ね。あなたから謝罪にきて、私のお願いを聞くって言ったのよ。どうゆうつもりかしらね」

「ねえ、奥様。とりあえずはお尻を出しなさいよ。ウンコはお尻を出さないと出来ないわ。踏ん張って、おもいっきり力んでみないさよ。少しくらいは汚い物が出てくるんじゃないの。アハハハ、、」

「だ、、だ、誰に物を言っているの。気分が悪いわ、、あんた達、ふざけないで。
ふざけるのも、いい加減にしなさい」

「あら、私達は本気よ。ねえ、奥様、ウンコするの、しないの。どっちよ」

「やるわけないでしょーーーー、、ふざけないでーーー」

「なに大声だして怒っているの。あんたが自分から苛めを受けるって宣言したんでしょ」

「ねえ、奥様。私の娘も同じように、抵抗したのよ。人前でウンコしろなんて、
普通は出来ないわよね。それを無理矢理、泣きながらウンコしたのよ。あなたその事は
どう思っているのよ」

「そんな事、、私の知ったことじゃないわーー。呆れたわ、、こんなに頭が悪い女達とは
思わなかったわ。もういいわ、これ以上話をしても無駄ね」

「あら、そんな事を言っていいの。ふ〜ん、いいの、後悔しないの」

「何を後悔するの。それはこっちのセリフよ。あなた達にここまで侮辱されて、私が
どれほどの屈辱を感じているか分かっているの。こんなことなら裁判のほうがマシだわ」

立ち上がり帰ろうとする絵理子に向かって由香里は、「ウフフ、、奥様、、本当にいいのかな
〜、あの事もばらすわよ〜〜」っと一言言い放つ。
その言葉に足を止めて振り返り、「どうゆう意味よ。」と若干不安な顔をする絵理子で
あった。

「ウフフ、、この写真、な〜〜んだ」

由香里は一枚の写真を取り出し絵理子に見せ付けるのだった。その瞬間、顔つきが変貌し、
目を大きく開けワナワナと震え出した。

「ねえ、絵理子さん。あなた不倫しているでしょ」

それは絵理子と男が二人で腕をくみ、ラブホテルに入っていく直前の写真であった。

「な、、な、、その写真は、、どうして」

「ウフフ、、探偵を雇ってあなたの事をいろいろと調べたわ。何か弱みがないかね。
まさか不倫なんてね、ウフフ、、いいネタがあったわ〜〜」

「た、探偵ですって。人の事をコソコソと、よくもそんな事を、、でも、、そ、それが、、
どうしたのよ。だからなんなの」

「何って、流れが大体分かるでしょ。ウフフ、、どうしようかな〜〜」

「ねえ、これでも証拠にならないかしら。奥様。どうなの」

「や、、やめてーーーーー」

絵理子は取り乱し、思わず由香里が持つ写真を取り上げて、その場でバラバラにする。

「そんな事しても無駄よ。いくらでも印刷出来るんだから」

「なんのつもり、、こんな物、、どうゆうつもりよーーー」

「どうゆうつもりって、不倫現場の写真よ。これ奥様でしょ」

「私は知らないわ。私じゃないわよーーー、、、」

「へえーー　そうなの。本当に、、ウフフ、、まあ、確かに横顔だし、分かりにくいって言えばそうだけどね、だったら旦那様に見せてもいいわよね」

「これは私じゃないわ。あなた達、こんな事で弱みを握ったつもりなの」

「へえーー、、奥様は否定するんだ。いいわよ。じゃあ、バラまいても問題ないわよね」

「まあ、世の中には似た人間がいるっていうもの。奥様が言い切れれば、それでいいんじゃない」

「じゃあ、この写真を旦那や近所にばらまいて、イジメの裁判も起こして、絵理子さんの出来のいい娘が受験する有名私立に「不貞な女」「いじめを黙認するモンスター」って報告しとくわね」

そう言うと真理・由香里は立ち上がり、帰ろうとドアに向かい歩き出した。

「待ちなさいよーーー、、」

絵理子は必死になり二人を呼び止める。

「そんな写真、、私に似ているってだけでも、こっちにとっては都合が悪いわ。
私は不倫していないし、、、いじめの事だって、、そんなウワサが立てば
私の立場がなくなるわ。お願い、やめてーーー」

「あら、さっきはあんなに強気だったのに、私たちの事を舐めていたのね。
裁判に勝とうが負けようか、あなたが不倫をしていようが関係ないわ。
私達はあなたを追い詰められればそれでいいの」

さっきの勢いが消え唖然としている絵理子に向かって真理は
「でも、これ奥様でしょ。いい加減白状したら」っと、からかうように言うと、
絵理子はキっと睨み返し感情的に喋りだす。

「私じゃないって言ってるでしょーーー、、証拠みせないさよーーーー」

「あらら、あんなに冷静だった奥様が見っとも無いわね。ウフフ、、また
インテリ知識の証拠話かしら。さっき由香里も言ったけど、そんな事、
どうでもいいのよ。あんたの立場を悪く出来るような材料を、私達は持っているのよ。
絵理子さんの弱みを握っているのよ。理解できたかしら」

「どうするの。この写真をバラまいてもいいの。」

「・・・・こんな事、、あなた達、これで満足なの。こんなのこと卑怯よーーー」

「ふん、なに開き直っているの。イジメや不倫して、堂々としている人間に
そんな事を言われる筋合いはないわ」

予想外の展開に絵理子は唇を噛み締め、ワナワナと振るえている。

「ねえ、どうするの。絵理子さん、このまま帰るの」

「やめて、、お願い、、さっきの写真も、、裁判も、、困るわ、、」

「なに、私にお願いしているの。アハハ、、絵理子さんがこの私に、、そうなんだ。
だ〜〜だったら、さっき私が言った事、出来るかしらね」

絵理子の頭の中では「土下座」が思い浮かび「こんな女の前で、、」っと屈辱感が
止めど無く湧き上がったが、この場を切り抜けるには自分が下手に出る以外には
方法がなかった。

「わかったわ。誠意を見せればいいんでしょ」

「演技よ、、演技、、」自分にそう言い聞かせ、少し時間を置き深く深呼吸をした後、その場
に座り込み手をついて土下座を行う。
格好だけ、、とりあえずは、、そんな事を言って自分を納得させようと試みるが

いざ由香里に頭を下げ土下座をしてみると、凄まじい屈辱感で胸が張り裂けそうになり、
やり場のない怒りが込み上げるのであった。

「許して、、この通り、、」

「なにしているの。」

「何って、、何って、、土下座でしょーーー。あなたがやれって、、」

「なに勝手に土下座なんかしているの。そんな気持ちが微塵もこもっていない
見え見えの芝居なんかしても無駄よ。私達の目的はあなたにイジメの辛さを
分かってもらう事なのよ」

「私は土下座までしたのよーーーー、、」

「あんたの土下座にそこまでの価値があるの」

演技とはいえ絵理子が他人に頭を下げるなど、今までない事である。その土下座を
あっさりと否定された事は許せなかった。

「じゃあ、なによ。なにをすればいいの。お金でもなく、土下座でもない。
あなた達は、、私に、、私に何をさせたいのよーーー」

「ウンコ」

平然と「ウンコ」と言い放つ由香里に、絵理子はワナワナと全身を震わせ
真っ赤な顔で反論する。

「いい加減にして、、」

「しないの、ウンコ。奥様」

「当たり前よ、、第一、今すぐにやれって言われて、、出来るものじゃないでしょーー
冗談は程々にしてーーー」

「ねえ、最初から努力もせずに出来ないじゃないでしょ。出来ないにしろ、せめて

誠意だけでもみせないと、世間は納得しないものよ」

「奥様には、そうゆう誠意が欠落しているわ。私達はウンコしろって言っているのよ。
出来る出来ないは別にして、お尻を出して排便をするために踏ん張るくらいの
事はしないとね」

「ふ、、ふ、、踏ん張れですって、、、よくも平然とそんな事を、、いい加減にして。出来るわけないでしょ」

「そう、出来ないのね。だったら、ウンコしないなら、さっさと帰りなさいよ。
私達はどっちでもいいのよ。
奥様に娘と同じ恥ずかしい思いをしてもらうか、不倫・イジメの事を公にして
社会的な制裁を受けてもらうかね」

「そんな下品な事を、、私にそんな事をさせて満足なの。人の弱みに付け込んで、、
こんなの、、イジメと変わらないじゃないの。そんなの卑怯よーー」

「ねえ、あんた自分の立場分かっているの。何が卑怯よ。自分の事を棚にあげて
言いたい放題言って。やるの、やらないの、どっちよーーー」

「お尻を出してウンコしろ」、普通、一般的にはそんな事を強制される事はまず
ないであろう。
たとえ真似事でもそんな事を立派な大人が、セレブである自分が行うなど、まして
それを由香里の目の前でなど出来る訳がない。
しかし、いくら考えてもこの場を逃れる術は他になく、絵理子は無言のまま呆然と
している。

「あら、どししたの。絵理子さん。黙っていても事が進まないわよ」

「あんた、このまま黙っていれば済むと思っているの。簡単な選択でしょ。不倫写真
なんて、旦那が見れば間違いなく疑われるわよ。それをウンコする真似事だけで
黙ってもらえるなんて、一体なにが不満なのよ。あんた一人が我慢すればいい話でしょ」

そう言われれば絵理子に否定する選択はなかった。
排便の真似事をすれば全てが解決するというのなら、一時の屈辱に耐えれば良い話で
あると割り切るのであった。

「やればいいんでしょ、、、」

「何をよ。奥様は何をするの。はっきり言いなさいよーー」

「なにって、、」

「あんたね、上品ぶるのもいい加減にしなさいよ、ウンコって言葉も言えないの」

完全に由香里が優位な立場となり話が進んでいく現実は、絵理子が想像していた以上の
屈辱であった。ついさっき決心した覚悟が今にも崩れそうでであったが、考え方を
変えれば子供染みた遊びに少し付き合えば良いことで、適当に話を合わせ演技をすれば
いい。
そう割り切って必死に自分を殺そうとする絵理子であったが、そんな思いとは裏腹に
屈辱感は止めようがなく溢れ、胸が張り裂けそうであった。

「わ、、分かったわよ。ウ、ウンコするわよ、、ウンコすればいいんでしょーーー。」

必死に平静を保ち屈辱を感じている事を隠そうとして喋ろうとするが、声が震え
羞恥の気持ちがにじみ出ている。
イジメの裁判、不倫現場を捕らえた写真。いずれも証拠としては決定的な物では
ないが、面倒な事態となる事は確かだ。堅物の夫が不倫の疑惑を持てば関係も
ぎくしゃくし、イジメについては、娘の進学にも多少は影響するかもしれない。
一時の屈辱を少し我慢すれば済む話、その条件であれば、、、っと必死に自分に
言い聞かせるのであった。

「なに必死になって喋っているのよ。たかがウンコでしょ。そんな事で勿体ぶって、
随分とお高くとまっているけど、奥様のウンコってそんなに価値あるの」

「なにを言うの、、そんな事、、人前でやれって言われて、、出来ないのが普通よ」

「だから、あんたの場合は、娘の償いでしょ。ウンコするって決めたなら
さっさとしないよ」

「こっちだって、本当は奥様の汚いウンコなんて見たくないのよ」

「き、、き、汚いですってーーーー、、、」

「あら、奥様のウンコはバラの香りもでするのかしら」

「アハッハ、、真理ったら、、そんなウンコないわよ。ねえ、絵理子さん。
まずは、「由香里さん、ウンコします」って宣言して、今までの事を謝ってちょうだい」

「、、由香里さん、、う、、ウン、、ｺ、、ｳｳｳ、、、」

「なに、聞こえないわよ。ねえ、PTA 会議で堂々と話をするように、ハキハキ喋ってよ」

「由香里さん。娘のイジメを、、娘がした酷いイジメを、、私が代わりに償うわ。
ウ、、ウンコをします。それで許して、、」

絵理子は心の中で「これは演技よ、演技」っと自分に言い聞かせ、自分自身を
無理矢理納得させ、ようやく発せられた言葉であった。

「アハハ、、あの上品で育ちの良い絵理子さんが、ウンコなんて言葉を言うのね。
以外とイジメもやる方は面白いわね。じゃさ、早速してもらおうかしらね。
まずは順番からしてお尻を出さないとね」

「、、ここで出すの。ここで、、」

「当たり前でしょう。ほら、さっさとケツを出しなさい」

「まずこっちにお尻を向けないさ。そして、そのスキニーパンツと下着を脱いで、
お尻を出しなさいよ。いいこと、真面目にしないなら許さなからね。娘が
どんな気持ちで人前でお尻を出して排便したのか、それを自分の身を通して
経験しなさいよ」

絵理子は唇を噛み締めてワナワナと震えながら、鈍い動作でスキニーパンツに手を掛け
脱ごうとするが、なかなか進まない。
自分の中では既に覚悟・決心はしたものの、由香里の前で脱ごうとすると、想像していた
以上に羞恥心が邪魔をして思うように動作に繋げられない。

「ねえ、なにしてるの。奥様、さっさとケツを出しなさいよ」

「お尻も出せないなら、あなたの事を許すことは出来ないわ」

「待って、、わかったから、、わかったわよーー　」

「あんたね、ひょっとして恥ずかしいなんて言い出すんじゃないでしょうね。
私の娘も同じ事を無理矢理やらされたのよ。その事を思えば、親の責任として
償いをすると思えば、出来ない理由はないわ」

「わかっているわよーーー、、やるわよ。やればいいんでしょーーー」

絵理子は眉間にシワを寄せ、羞恥・屈辱と必死に戦う。そしてゆっくりではあるが、スキニーパンツを脱ぎ、パンティーストッキングとパンツを脱いでいく。

「へえー、高級そうな下着ね。アハハ、、」

「ねえ、もっと男を挑発するように色気を出して脱ぎなさいよ。アハハ、、」

絵理子の羞恥になど全く配慮ない由香里・真理の罵声。胸が張り裂けそうな思いを
抑えながら、ようやく下着を脱ぎ半ケツとなり尻の割れ目を出したが、そこで動きが
一旦とまる。

「あら、動きが止まったわね。どうしたの。ねえ、なにしているの。早くしなさいよ」

「ねえ、、こんなこと、、本当にやるの。大人のやることじゃないわ」

「当たり前でしょーーー、、さっきから、なにもったいぶってんの。早くしなさいよ。
こっちだって、あんたの汚いケツなんて見たくないのよ。三十路を超えた女が、ケツを出す位で、いちいち恥ずかしがらないでよ」

「な、、なんですってーー、、ひ、、酷い、、、」

「なにが酷いの。あんたさっきから何よ。やる気あるのーーー」

あまりの屈辱に、またも胸が張り裂けそうな苦痛を感じる絵理子であったが、この場から
逃げる事が出来ない事は認識している為、尻を出す意外の選択肢はない為、思い切って

下着を下ろし臀部を完全に露出するのだった。

「あら、綺麗なお尻ね。ウフフ、、奥様、プリンってしているわね」

他人の前で、ましてあの由香里の前で、尻を露出することは由香里が想像する以上に
屈辱的であった。
あの写真さえなければ、、っと何度もその事が頭の中を過るが、後の祭りであり、
今の現実としてはどうしようもなく、子供染みた由香里の仕打ちをただ耐え抜く
しかなかった。

「ウフフ、、惨めね。奥様」

「ふん、人を見下してきた報いよ。今までのツケと思えば、安いものよ。
ねえ、絵理子さん。そのお尻から、何を出すの」

分かりきった事をあえて聞く由香里に絵理子はブルブルと震え、真っ赤な顔で
下を向いて唇を噛み締めている。

「ねえ、聞こえないの。そのお尻の割れ目の奥から何をするのよ」

「、、う、、ウンコです」

「今日は出たの。ウンコ。ねえ、今日はウンコしたの」

「・・・・・答える必要はないわ、、」

止まらない羞恥攻撃に怒りを感じた絵理子は、弱みを握られている事を忘れ反論しる。
はたから見れば子供染みた低脳な意地悪であるが、それが想像以上に屈辱を感じるもので
耐え難いものであるとは、絵理子自身が驚いていた。

「あら、そんな事を言っていいのかしらね、奥様」

強い口調で返す真理の言葉に、反論する事は出来ないと再認識する絵理子は
仕方なく質問に答える。

「していない、、」

「なによ、はっきり言いなさいよ」

「ウ、、ウンコ、していません、、、」

「何よ、便秘なの。きったな〜〜い、」

「だったら、いつしたのよ。ウンコした日を教えてよ」

「お願い、、もういいでしょ。子供みたいな事はしないで、、」

「なに言ってんの。子供みたいなイジメがどれだけ辛いかを経験させているのよ。
まだ始まったばかりよ、奥様。ウフフ、、今日は、なが〜い１日になるわよ」

「じゃあ、奥様。お尻の割れ目の中に指を入れるようにして、両手でお尻の肉を掴むようにしてちょうだい」

「何故」「何のために」、そんな疑問よりも、子供が発想するような悪戯に早く飽きて、
開放される事を望む絵理子は、とりあえずは逆らわずに付き合う方が良いと判断していた。

「これで、、いいの」

「そう、そう、お尻の肉を自分の手掴む感じよ。ウフフ、、いいわね〜〜」

「じゃあ、その指先をお尻の割れ目に押し込んで、左右に開いてよ」

「・・・・え・・・なんですって、、、」

「お尻の割れ目を、おもっきり開きなさい。さあ、早く」

「・・・・・・・・・」

「聞こえないの。お尻の割れ目を自分の両手を使って、おもいっきり
左右に広げなさい」

絵理子はその言葉の意味を理解していたが行動に移すことは出来なかった。

普段は決して他人の目には届かない場所、最も身近な身内である旦那にすら
見せる事なく潜んだ場所を、自らの手で開けと平然と言い放つ由香里。
人間の排便と考えればその場所との関係性は深いが、興味本位のプレイ
としては世間一般ではタブーとされる穴である。
そこをただ笑いものにしたいが為に、羞恥の対象にしようとしている由香里・真理の
事を思うと、絵理子は今までの人生では感じた事のない怒り感情が溢れていた。

「この女、頭悪いのかしら。私の言っている事がわからないの」

「別の言い方の方がいいんじゃないの。奥様、肛門を見せて」

「聞こえないのかしら。あたな耳も悪いの。お尻の穴よ。肛門よ、肛門」

絵理子は口元で「ふざけないで」っと声にならない声をあげ、屈辱のあまり
体を小刻みに震わせている。

「絵理子さん、何しているのよ。さっさとしないよーーー」

「そんな難しい言ってるかしらね〜〜、、セレブ夫人には肛門が無いのかしらね」

「アハハ、、そんなわけないわよ、真理。きっとウンコしたての立派な
ケツの穴が付いているわよ」

「、、度が過ぎるわ、、」

絵理子がようやく発した言葉はその一言であり、それは否定の意思を示していた。

「はあ、何がよ。あんた何言ってんの。私達の言う言が聞けないの」

「こんなことして楽しいの、、立派な大人のやる事じゃないわ」

「なによ、この女。ケツの穴を見せるくらいで何マジになっているの」

「ねえ、絵理子さん。屁理屈はいいから、さっさと肛門を見せなさい」

――肛門を見せる――、、出来ないと宣言したにも関わらず、はっきりと口にして

突きつけられ無理強いされた事に、絵理子は我慢していた感情が急激に高まり、またも怒りが頂点に達する。
激しい怒りは二人を罵声する言葉となり、喉元まで押し寄せてくるが、人生の中で感じた事のない屈辱感を脳内で制御出来ず言葉が出てこない。
由香里・真理には、屈辱に塗れワナワナと震えている絵理子の姿が楽しく、さらに追い討ちをかける。

「ねえ、はやくしなさいよ。いつまで待たせるのよ。そんなに難しい事じゃないでしょ。お尻の割れ目を開くだけじゃないの」

「あ、わかったわ。ひょっとして今日、ウンコした後しっかりと拭いてこなかったんでしょ。肛門にウンコの残りカスが付いていたりして」

「プ、、アハハ、、真理ったら下品ね。相手はセレブの奥様よ。肛門くらい吹いているわよ」

今まで生きてきてこれ程の屈辱があっただろか。絵理子は弱みを握られている事など頭から消え、感情のおもむくままに言葉を発する。

「馬鹿にしないで、、、いい加減にして、、」

肛門を見せろなど、そんな事は人生の中で一度も言われた事もないし、意味もなく見せた事もなど一度もない。
ましてプライドの高い絵理子が、笑いもにされる目的で見下している由香里や風俗嬢の真理に自分の肛門を見せるなど、想像しただけで気が狂いそうな羞恥であった。

「あら、絵理子さんはおかしな事を言うのね。あなたは私達にそんな態度をとれるの」

「あんたに選択権なんて無いでしょう。写真の事を黙っていてほしいんでしょう。だったら私達の言う事、ケツの穴を見せるしか方法は無いわよ」

由香里・真理に対して後ろ姿の絵理子は、尻を露出した状態で羞恥に溢れワナワナと震えて唇を噛み締めている。
しかしそんな気持ちに配慮してくれる人間など、ここにはいない。
全く動きの無くなった絵理子に向かって、容赦ない言葉が放たれる。

「ねえ、なにしているの。さっさとしなさい」

「ねえ、肛門みせないなら、浮気写真をばらまくけど、いいの」

「しゃ、、写真って、、卑怯よ、、卑怯よーー、、そんな事、、こんな屈辱、、、、」

「何、聞こえないわ。そんな震えた声で言ってもわからないわ。奥様」

「ねえ、絵理子さん。あなた勘違いしているみたいね。主導権は私達の手に
あるのよ。私の言う事が聞けないのなら、浮気写真を近所のポストに入れて
バラまくわよ」

「な、、そんな、、」

「そんなじゃないでしょーーー、、さっさとしないよーーー」

「わ、、わかったわよ。見せればいいんでしょ。やるわよ。やればいいいんでしょうーー」

肛門を見せる以外に選択肢が無いと悟った絵理子は、自分の尻の割れ目に指先を入れ、
半分やけくその気分で尻を割り開こうとするが、羞恥心が邪魔をして肛門まで露出せず
少しだけ尻の割れ目が開かれただけであった。

「何、それでお尻を開いているつもり。もっとおもいっきり開きなさいよ」

「ケツの穴のシワが見えるくらいに開きななさいよ」

「もう許して、、お願い、、、無理よ、そんな事」

「無理なの。そう、それで終わるの。ふ〜〜ん。絵理子さん、出来ないで許してもらえる
程、世の中は甘くないわよ。せめて誠意だけでも示さないと世間では通れない事も
あるのよ。」

「そんな事言われても、、、出来ないものは、、出来ないわ。お願い、、こんな事、
もうやめて。いじめの辛さは充分にわかったわ。娘の事も、、謝るからお願い、、」

由香里との押し問答となっている話題は自分のお尻の穴・肛門であると思うと、
絵理子は惨めさ・情けなさと羞恥を通り越した始めて感じるような嫌悪感により、

まともにその現実を受け止められずに目を閉じ俯いていた。
そこに真理が忍び足で近づくと、強引に絵理子の尻の割れ目をワシ掴みにすると
「ほ〜〜ら」っと尻を左右に広げようと、引っ張るのだった。

「キャァアアアアーーー、何するのよーー　や、、やめてーーー」

後ろ向きで完全に無防備であった尻を他人の手で突然開かれるなど、予想だに
しなかった展開に、悲鳴を上げてその場に座り込んだ。

「なによ、座り込んで。お尻の穴が見えないでしょ。ほら、、肛門みせなさいよーーー」

自分の肛門を他人に見せるなど、三十を超えた社会的立場のある人間が受けるには、
とても耐え難いものであった。
絵理子はあまりの羞恥に両手で顔を押さえその場に座り込むと、自分の中では
たかが女の子のいじめと思い軽く見ていた事が、これほどの屈辱をもたらすものかと
実感するのだった。

「なによ、勿体ぶって。こっちだって三十路を超えた女の汚い肛門なんて、見たくないわよ。奥様に反省させるために、やっている事なのに、あんたケツの穴までプライドがあるの」

「き、、き、、汚いですってーーーー」

「あら、肛門だから汚いのは当たり前でしょ。それとも奥様のケツの穴は違うのかしら。
ジャスミンの香りでもするのかしらね。アハハ、、だったら、ますます興味あるわね」

「きっと人一倍に臭いわよ。外面は綺麗でも中身は最低、、あんたの歩んできた
人生が肛門にも滲み出ているわよ」

自分の人生を「肛門」と表現されたことに怒りが溢れ、あまりの羞恥に両手で顔を押さえ、
震えなが絶えている。

「なんか、事が進まなくて面倒臭い女ね。もういいわ、その場でウンコ座りしなさい」

本当に排便する訳ではなく羞恥目的の、形だけの約束など適当に応じておけば良い。
それが生のお尻を自分自身で露出し、肛門を見せろと強要され、さらにウンコ座りまで

させられるなど絵理子にとってみれば全てが想定外であった。

「ねえ、何しているの。早くしなさい。和式便器に跨るようにして、こっちにお尻を向けなさい。早くしなさいよーーーー」

由香里は怒鳴り声をあげるが、半ケツ状態で座り込みその場で呆然としている絵理子は
動きが止まっている。

「ほら、グズグズしないの。」

由香里・真理に捕まれて、無理矢理しゃがまされ、和式の便器に跨るように
「ウンコ座り」をされられる。
その結果、普段は完全に閉ざされた尻肉を割り開かれ、その谷間の奥に存在する肛門
皮膚は外気の空気を全体に感じ取り、それが刺激となり絵理子の脳内に伝わると、
あまりのおぞましさに歪む顔を背けていた。

「アハハハ、、いい気味ね。さあ、いいわよ。ウンコしてね」

「頑張って、汚いものをひり出しなさいよ。娘も同じ事をさせられたのよ。
それを思えば、あんたがウンコする事くらい何よ。早くしてね、奥様」

この女達の一番の目的は子供染みた苛めを行い「辱める事」、排便するなど本当の目的ではなく結局最後はお金を要求してくる。
演技をして付き合うのはここまでで充分だと判断した絵理子は、娘のイジメの償いとしてはそれに見合う事は達成出来たと自分の中で決着していた。

「由香里さん、もういいでしょ」

「あんた、本気でやってないでしょう」

「もう無理って言ってるじゃないの。充分でしょーー」

絵理子が否定の意思を示した瞬間、パッシーンっと由香里が絵理子の露出している尻を
平手打ちする。

「なにするのよーーーー」

ウンコ座りをして尻だけ露出している情けない姿に尻叩きされ、さらに追い討ちを
かけられた事で我慢していた怒りが抑えられずに、由香里を鋭い目線で睨み付ける。
その表情は今まで培ってきた強気な性格を反映させており、まだまだ根元からは
屈服してはいない事を現していた。

「あら、反抗的でいい表情ね。ウフフ、、それで終われる思っているの。あなた本気で
やっていないでしょ」

「、、充分でしょ。私はここまで付き合ったのよ。もう子供染みた事はやめて」

これ以上は付き合えない、、そう判断した絵里子は脱いだ下着とスボンを再び履き
だした。

「もう満足したでしょ」

「満足ですって。あんた寝ぼけるのもいい加減にしなさいよ。このまま帰るのは
いいけど、そんな事をすればどうなるか分かっているの」

「ねえ、弱みを握られているのを忘れたの。いいのかしら」

「それは忘れてはないけど、こんな事を続ける事に意味はあるの。
お互い大人だし、、女の子の苛めなんて意味のない事はやめて」

「さすが奥様ね。全く反省の色がないわね。それでこそイジメがいがあるわ」

「ねえ、絵理子さん。ここまでしたって言うけど、まだまだこんなもの
じゃないわよ。あんたの娘がしてきた事はぜん〜〜ぶ、経験させて
あげるわ。ウンコの真似事くらいで弱音を吐いてどうするのよ」

「お願い、、一旦、冷静になってもう一度話をしましょう。
由香里さんの言っている事もわかるけど、あなたのやろうとしている事は
大人の世界じゃ犯罪になるわ。逆に訴えられたら困るでしょ」

「へえーー　私を脅すのね。そんな口先の言葉くらいで私が弱腰になると

思っているの。どうやらあんたには娘の辛さを身を持って分かってもらう
必要があるわね」

「それはさっきしたじゃない。もういいでしょ」

「奥様、あんなものは序の口よ。私の娘はね、縛られて身動きが出来ない中、
暴力を振るわれたり、今根性焼きと称してタバコを押し付けられたり、残飯を無理矢理
食べさせられてお腹を壊したり、裸で土下座させられたのよ。それをあんたは女の子の
イジメと言って軽く見て罵ったわ。あんたが反省出来ないようなら、いま言った事を全部
してやるからね。利子付きでもっと酷い苛めとして苦しめてやるわ」

「はあ、、ちょ、、ちょっと待ちなさいよ。そんな脅しはやめてよ。大人の世界じゃ完全に
刑事事件になって犯罪になるわよ。あなたそれを分かって言ってるのーー」

由香里と絵理子のやり取りの中、真理はSM用の拘束具を持ち絵理子に忍び足で
近づくと、慣れた手付きで素早く手首に装着させるのだった。
何事かと驚く絵理子は見たこともない器具を自分の手首に付けられた事で
驚きの余り身が硬直していたが、真里はそのスキに足首にも同様な形のものを
取り付けようとしていた。

「きゃあああああああーーーーー、、な、な、、なにしているのよーーーー」

「今、由香里が話した通りイジメ体験よ。これで奥様を縛ってあげるわ。
身動きが取れない事がどれほどの恐怖を感じるかを経験させてあげる」

「し、、縛るですって、はああーー、、何を言うのよーーー」

「あなたのウンコのやる気の無さが原因でしょう。きちんと誠意を見せて反省
できるまで、いろいろなイジメを体験することになるわよ」

「、、こんな子供みたいな事して、、、それで満足なら、、縛るなり何でも
勝手にやりなさいよ。―――」

真理は絵理子の吐き捨てるような返事を聞くと同時に、手際よく作業を行う。
右手首の手錠を右足首の拘束具に設置すると、絵理子はその場に直立する事が
出来ず、左足を曲げてその場に座り込む。

「はあぁぁーーー、、ちょ、ちょっとーー　なによ、これ、、」

自分の頭の中で想像する「縛る」とはかけ離れた事であった為、動揺する
絵理子であったが、さらにもう片方の手首・足首を拘束具で一つに繋がれる。

「なにこれーーー、、縛るって、こんな格好にして、なんなのよーー」

それぞれの両手・両足首を繋がれて再びウンコ座りとなった絵理子は、
今の自分の姿を認識すると血の気が引いたような表情となったが、由香里・
真理の一線を超えた仕打ちに、何よりも怒りの感情が湧き上がり鋭い目付きと
表情に変貌するのだった。

「なんなのよーーー、、一体何のつもりよーーー、、解いて、、解きなさいよーー」

「アハハ、、奥様お似合いよ。いい格好ね〜〜」

真理は絵理子の背後に回ると足でグイっと前に突き飛ばす。
絵理子は後ろから押された力により、前方に倒れそうになったが
膝で何とな支えその場に踏ん張り留まる事が出来たが、由香里に背中を
上から押さえ込まれ、その場にうつ伏せで寝るような格好になってしまった。

「はあぁぁーーー、、ちょっと、ちょっとーーー、、こんな格好、、これ解いて。解きなさい」

美しい女性が手足を一つに繋がれた状態でうつ伏せにされる姿は、なんとも
いえないエロチェックな姿であった。

「アハハ、、まるでカエルね。そんなにケツを突き出して、エロいわね。そうやって
男を誘惑しているのね」

「何のつもり、、こんな身動きの出来ない状態にして何をするのよ」

「そうね、何しようかな〜〜、、ウフフ、、身動きがとれないから、何しても
いいわよね。アハハ、、」

「女の子の苛めてって、結構面白いものね。気に食わない相手を攻撃するって

ことじゃこの上ない仕返しが出来るわね。アハハ、、クセになりそうね」

そう言うと真理は、今度はSM用のムチを取り出すと絵理子の突き出した尻に
向かって振り下ろした。

「ほら、嬢王様といいなさい」

パシーン、パシーンっと繰り返し尻に受ける衝撃に驚いた絵理子は
後ろを振り返ると、真里からムチで尻を叩かれている事を認識すると
信じられないような現実に目眩がしていた。

「やめなさいよーーー、、何しているの、、正気なのーーーー、、
なんで私が叩かれないといけないのよーーー」

羞恥のあまり我を忘れて抵抗する絵理子であったが、ムチの勢いは増す
ばかりであった。

「ウフフ、、絵理子さん。悪い事をしたらお仕置きされるのが世の常識よ。
あなたは子供の頃、甘やかされて育ってお尻なんて叩かれた事ないんで
しょうね。」

「当たり前よーーーーー、、そんな低俗な事、、私はされた事ないわーー」

「その結果が、あんたみたいな歪んだ人間を育てたのね。子供の頃に受ける
べき教育を受けていないから、そんな事になるのよ」

「な、、なんですってーーー、、誰の事を言っているのよーーー」

「ねえ、由香里。この女、生意気じゃない。少しケツでも叩いてやろうかしら」

「そうね。絵理子さん、私があなたの親に変わってお尻ペンペンしてあげるわね」

絵理子にはその言葉の意味を理解し怒りを感じるような余裕はなく、ただ目の
前の二人の女が許せなかった。こんなみっともない格好にされた上、
尻をムチで叩かれるなど今だに現実が信じられなかかったが、由香里の手が
スキニーパンツのホックを外し脱がす素振りをみせた瞬間、悲鳴のような

声を出し抵抗するのだった。

「何しているのーーーーー、、ちょ、、ちょっと待って、、いや、、いやよ、、
やめて、、、やめないさよーーーー」

スキニーパンツは膝下まで下ろさ、絵理子のベージュ色の下着が露出するのだった。
自らの意思ではなく拘束具によって維持された姿勢は、とても抜け出す事は出来ない。
下着姿で突き出した尻はスキニーパンツの時と比べると、より尻の形が浮き出ていた。

「ウフフ、、大きなお尻ね〜〜〜」

由香里は絵理子の尻をパンツの上から撫でるように触り出す。

「なに、、待ちなさい、何するのよ。やめて、、、触らないでーーー
やめなさいよーーーー」

絵理子は抵抗出来ない無防備な状態で由香里に触られた事で、ついさっき耳を
過ぎった「お尻ペンペン」という言葉を頭に思い浮かべる。
その瞬間、今まで完全に見下していた由香里からお仕置きと称し、尻を
叩かれる姿を想像すると、「冗談じゃないわ、、」と頭の中で否定したが、
どんなに力を入れて抵抗しても、とても解けるようなものではなかった。

「由香里さん、、もういいでしょう。女の子のイジメとしては充分のはずよ。
これで終わりにして、、」

「何言ってるの。まだ何もしていなわよ。身動きがとれない状況で暴力や
辱めを受ける事がどんなに辛いか経験してもらわないとね」

由香里はそう言い放つと、絵里子の腹を片手で抱え込み、まるで子供が
お尻を叩かれるように持ち抱えると、下着の上からバシバシと尻を叩き
だすのだった。
パッシーン、、パッシーンっと、部屋中に尻肉を叩く音が鳴り響く。
それは「お尻ペンペン」という生易しいものではなく、絵理子にとってみれば
辱めよりも痛みの方が強烈であった。

「痛い、、痛いーーーー、、痛いーーーー、、やめて、、やめなさいーーーー」

「痛いじゃないでしょ。あんたさっきから何よ。反省する気があるの。
聞き分けの無い子にはお仕置きよ。何がセレブ婦人よ。あんたみたいな女は
ケツでも叩いてやらないと、反省も出来ないみたいね」

「こんな事、、、何で私がーーー、、痛いーー、、やめて、、やめてよーーー、、
わかったわよーわかったから、、ちょっと痛いってばーーー、、やめて、、
やめてお願いよーーーー」

「子供の頃にお仕置きとして、ケツも叩かれた事ないような勘違いしたお嬢様には、
私達が教育し直してあげるわよ。覚悟しなさい」

お嬢様として育った絵里子には、「お尻叩き」など経験がない。スパンキングなど
子供が受けるお仕置きで、決していい大人が受けるような事ではないが、その効果は大きく、絵理子に与える精神的な屈辱は相当なものであった。

「痛い、痛い、、いや、、やめてーーー、、もういいわーーー、、もうわかったから、、、」

絵理子の必死の叫び声は、下着の上から叩かれるスパンキング音にかき消されていた。
由香里にお仕置きさている、、
立場、社会性、その他あらゆる面で並以上に優れ、下と見ているなかでも、最下層に当たる由香里から尻を叩かれている。
その現実を再認識するにつれ、痛みより羞恥・屈辱が大きく上回っていく絵理子であった。

「ふん、このくらで何言ってんの。少しケツを叩いたくらいでもう根を上げているのね」

「ウフフ、、ねえ、由香里。今度は私に変わってよ。私も奥様を辱めたいわ」

絵理子は真理を見てキっと睨みつけるのだった。真理とは全くの面識はなく
ただ由香里の知人という立場でありながら、辱めるなどと平然に発言している。
こんな女に、、っと思うと絵理子は止め用のない悔しさと怒りが溢れ、
自分でも制御できないような感情にとらわれていた。

「ウフフ、、奥様〜〜、、どう縛られた感想わ。身動きが出来ずに何をされるか
わからないっていうのは辛いでしょ。こんな思いを子供が経験したのよ。
あなたにはその事を身をもって償う責任があるわね」

「あなたには、、関係ないでしょ。そんな言い方はやめて、、」

「アハハ、、鋭い目付きで睨むのね〜〜、、いいわよ。そうゆう反抗的な態度は
歓迎するわよ。気の強い女にはね、生かさず殺さずに少しずつ料理するのが一番
いいのよ」

「、、、あなたは精神異常者よーーー、、最低じゃないの、、、」

「ウフフ、、そうよ、最低よ。虐められる立場になってからこそ、虐める側の残酷さも
も気付けるでしょう。
さあて、どうしようかな〜〜、、どんな事してあげようかな。
奥様が恥ずかしく嫌がる事を考えて、それをネチネチとしてあげようかな」

「、、いいわよ、、あなたも私のお尻を叩けばいいじゃないの、、
それで満足するならそうしなさいよーー、、でもそれでもう開放して」

「あら、お尻ペンペンは由香里がしたから私はいいわよ。それよりもね、さっき
奥様のお尻の穴を見ようとして、お尻を広げようとしたけど、見れなかったわね〜〜」

その言葉の意味に絵理子は全身に寒気を感じるような錯覚に陥っていた。
お尻の穴、見る、この体制で、完全に無防備、、、そんな言葉や単語が頭の中でぐるぐると
駆け巡り最後に出た結論は当然の事、強烈な否定であった。

「ウフフ、、セレブ奥様のお尻の穴って、どんな形をしているのかな〜〜。
由香里、興味ない」

「そうね。さっき見せてくれなかったわね。〜〜〜　あんなに勿体ぶって
たんだから、私達の肛門とは違うんじゃないの。アハハーー」

「い、、、いやよ、、ちょっ、、ちょっと待って、、そんな冗談はいいからこれ解いて。
ねえ早く解いてよ。早く解きなさいよーーーーー」

「あら、冗談だと思っているの。その割には焦っているわね。奥様、肛門
見せてよ。いいでしょ」

「はあーーー、、あ、、頭、、おかしいんじゃないのーー、いいわけないでしょーーー、、」

「アハハ、、普段は余裕こいてセレブを気取っていた絵理子さんからは、考え
られないわね。あなたが何かに必死になるんて始めて見たわ。アハハ、、その無様な姿は
なかなか面白いわね〜〜」

絵理子の表情が恐怖を表すように変貌する。
自分の肛門を由香里と真理に見せる。そんなとんでもない現実離れした事を
想像するだけで、気が狂うような辱めである。
拘束具を自力で解こうと力を入れるが、イモムシのようにジタバタするだけである。
そんな絵理子に吹き出しそうになり笑いを堪えている由香里は、人差し指を絵理子の
突き出た尻の中心に向け、下着の上から肛門付近と思われる場所に密着させる。

「キャアアアアアアアアーーー、、何を、、何しているのーーーーー」

それは的確に絵理子の肛門を捉えていた。

「何って、汚いケツの穴を触っているのよ。有難くおもいなさい」

「き、、き、、汚いですってーーー、、ふざけないでーーーーー、、よくもそんな事を、、、」

「あら、奥様の肛門ってそんなに綺麗なの。へえーーー、、さすがセレブね〜〜
ウフフ、、それは見るのが楽しみね」

「アハハ、、そりゃ、セレブ婦人のケツの穴だもの。私達のとは違うわよ」

「、、こんなの、、こんな身動きが出来ない状態で、、こんなの卑劣よーー
大人なら正々堂々とやりなさいよーーー、、こんな事もうやめなさいよーーー、、」

「なに言ってのよ。この女。ねえ、由香里、私にも変わってよ」

真理は由香里と同じように下着の上から指先を肛門に当て、クネクネと
微妙な動きをして刺激を与える。

「ウフフ、、ここはどんな穴なの。ねえ、奥様」

真理はググ、、っと指先に直進の力を加える。
下着の布が肛門にピッタリと密着し、それをさらに押し込もうと真里は
指先に力を入れる。

「いや、、、いあやぁぁぁーーー、、なにするの、、やめてーーー」

肛門の小さな穴に下着の一部が埋もってしまうような感覚に恐怖を感じた
絵理子は、顔を左右に振りながら叫び声を上げる。

「キャヤヤヤヤヤァァァァーーーーーー、、まって、、まってーー
そんな、、いや、、」

「このまま根元まで指を押しこんでやろうか」

「や、、やめてーーー、、やめて、、お願」

「そうよね。やめてほしいでしょ。イジメられた方は、そんな気持ちになるのよ。
あなたには今からイジメられる立場の気持ちを少しずつ分かってもらうわ」

「ねえ、真理。そろそろ奥様の肛門を見ない。待ちくたびれたわ」

「そうね。じゃあ、拝見させて頂くわね」

「で、、で、出来るわけないでしょーーーー、、無理よ。いやだからねーーーー
絶対にやめて、、」

由香里は、絵理子の高級下着のパンティーを掴みおもいっきり引っ張るると、尻の割れ目
にパンティーが食い込みフンドシのようになってしまった。

「キャヤヤヤヤーーーーー、、、何するのーーーー、、やめてーーーーー」

尻を突き出し拘束されているポーズのせいで、食い込んだパンティーの上から陰部の割れ
目の形が浮き上がっている。

「アハハ、、すっごい光景ね」

由香里のパンティを持つ手にさらに力が入り、グイっと引っ張り上げ、さらに
フンドシ状態にする。
すると引っ張られ細くなったパンティーだけでは隠し切れない、肛門皮膚が僅かに
露出してしまった。

「やめてーーーー、、やめなさい、、、、こんな事してーーー,、何が楽しいのよーー」

「あはははは、、、、奥様、、すごい光景ね。あんなに上品ぶって偉そうに人を見下して
いい気味よ」

「ねえ、奥様。いい事教えてあげるわ。お尻の割れ目に食い込んだパンティーから
肛門のシワが少し見えているわよ。セレブ婦人なんだから人前でケツの穴のシワなんて
出しちゃしちゃ駄目よ。フフフ、、」

「し、、し、し、、シワですってーーー、、ふ、、ふ、、、ふざけないでーーーー
見ないでーーー、、ふざけないでーーーーやめて、、、やめなさいーーー」

「なによ、人の事を下品とか言って。自分は人前でケツの穴のシワを出して恥ずかしくな
いの」

「あなた達が無理矢理しているんじゃないのーーーー、、もういいでしょーーー
もう見たんでしょーーー、、だったら早くパンツを元に戻してよーーーー」

「なに言ってんの。まだ肛門のシワを少し見ただけよ。お尻の穴を見ないとね」

「そんなに嫌がらなくてもいいじゃないの。見られて困るものでもあるの」

「なに言うのーー、、人前で見せるものじゃないでしょーーー」

「そんなこと言って本当は今日、ウンコした後、きちんと肛門を拭いてこなかった
んでしょ。ウフフ、、拭き残しやティッシュがこびりついているんじゃないの」

「、、、、いい加減にしてーーー、、どこまで侮辱するのよ。こんな身動きが出来ない
状態にして、、言いたい放題言って、、こんな事が許されると思っているの」

「あんたの娘は許されているじゃないの。なに被害者ぶっているの。ねえ、絵理子さん。

この際、はっきりさせておくわ。今からあなたがされる事を。
まずは、お尻の穴を見せて頂くわ。肛門をおもいっきり広げてげて、穴の奥までみせてもらうわ。ウフフ、セレブ夫人だから、きっとケツの穴も綺麗でしょ。アハハ、、」

「あ、あ、、穴、、、穴の奥って、、一体、、どうゆう発想しているの、、信じられないわ。、、」

「ウフフ、、奥様恥ずかしいでしょ。でもね、私の娘は嫌な事を無理矢理させられて、散々苦しんだのよ。同じ思いを、いやそれ以上の苦痛を味あわせてあげる」

「じゃあ、肛門を見るわね。いいのよね、絵理子さん」

「いいわけないでしょーーーー、、」

「あら、納得してくれないの。それは困るわね。私、奥様と違って力任せに
強引に進める事は嫌いなの。お互いが納得しないと良い人間関係は作れないわ」

「ふ、ふざけ、、よ、よ、よくも、、そんな事を、無理矢理、縛って
こんな姿にしてーーー」

「ねえ、絵理子さん。あなたが肛門を見せたくなくても、このパンツを
脱がせばいいだけの事だけど、絵理子さんが嫌がっているのに、無理矢理
脱がせるなんてそんな可哀想な事、したくわないわ。だから、気持ちよく
進めるためにも肛門を見せる事を納得してもらえないかしら」

「納得できるわけないでしょうがぁぁぁーーーーーー、、ふざけるなーー」

「あら、乱暴な言葉使いね〜〜、、あんたさあ、立場わかっているの。
何度も言うけど、弱みを握られている事を忘れたの」

「それは、、、」

「娘もね同じ事をさせられたのよ。あんたの娘から
ウンコする前、人前で肛門を広げられて散々な侮辱を受けたわ。その事を
思えば納得出来るでしょう」

「ねえ、あんた勘違いしていない。いいのかしら。裁判、不倫、家庭崩壊に

比べれば、肛門を見せる事くらい何ともないでしょう」

「ねえ、どうすの。よ〜〜く考えて返事をして。嫌なら別にいいけど
あなたが一番困るんじゃないの」

「・・・・・・」

肛門、ケツの穴など普段の日常生活では使わない単語を散々浴びせられ、
絵理子は今の現実が夢ではないと信じられなかった。
真っ赤な顔で羞恥に押しつぶされそうになる絵理子に、容赦のない言葉責めは
まだ終わらない。

「私達だって奥様のウンコが付いた汚い肛門なんて興味もないし見たくも
ないわ。あんたに反省させる手段としてやっているだけよ。勘違いしないでよね、
このバカ女──」

「なんですってーーーー、、いくらなんでも、、
ここまで、、ここまでされる覚えはないわーーーー、、こんな屈辱、、、」

かつて経験した事のない怒り・屈辱・羞恥に、気がおかしくなりそうな
絵理子であったが、それは由香里・真理にとっては喜ばしい限りであった。
由香里は真っ赤な顔で羞恥のあまり小刻みに震えている絵理子のパンティを
掴むと、少しずつ少しずつ脱がしていった。

「はああーーーー、、何しているのーーーー、、
や、、やめてーーーー、、、いやぁぁぁーーー、、やめて、、お願い、、」

尻の割れ目が見え出したところで一旦、パンツを上げ、そして再び
脱がし始める。

「ねえ、いいでしょう。奥様。ねえったら。少しだけしか見ないから〜〜
ねえったら〜〜」

「どうするの。イヤならやめるけど、その場合、あなたにとっては
人生が変わるくらいの事態になるわよ。そよりはお尻の穴を見せた
ほうがいいんじゃないの。比べるまでもないと思うけど、どうするのよ」

「・・・・お願い、、これで最後にして、、今度こそ、、これで終わりにして、、」

「じゃあ、肛門見ていいのね。ねえ、奥様〜〜。」

「見たいなら　好きにしなさいよーー」

絵理子のその言葉と同時に無情にもパンツは下ろされてしまった。
パンツは全てではなく尻の半分まで脱がされ、そこに現れたのは当然の事ながら
絵理子の肛門であった。

「あはは、、、奥様の汚いケツの穴が丸見えよ。セレブ夫人ともあろうお方が
人前でお尻の穴を丸出しにしちゃって、、、いい気味ね」

「なによ散々、勿体ぶって、一体どんな肛門か気になったけど、私達のお尻の穴と
対して変わらないじゃないのよ。アハハ」

容姿端麗である絵理子が下着を無理矢理下ろされ露出した尻は、３０を超え
子供がいるとは思えない色白さ・美しさであった。
肛門形状も形が良く全く非の打ち所がなく美しいものであったが、それが真理・由香里に
とっては面白くないものであった。

「もう、、もういいでしょーーーーー、、もう見たでしょうーー　下着を戻してーーーー」

顔を床に伏せ羞恥のあまり震えた声で喋る絵理子でった。他人に肛門を見せるなど
とても考えられないような事である。それを由香里・真理の目の前で隠す事なく
シワの一本、一本まで露わにしていると思うと、顔から火がでるような、身が
裂かれるような思いであった。

「え〜〜、、まだいいでしょう。ウフフ、、私、もっと、も〜〜っと奥まで見たいわ〜〜」

絵理子の哀願を聞き入れるどころか、真理は尻を掴むと、おもいっきり左右に広げて
肛門のシワを引き伸ばす。

「キャヤヤアアアアアアーーー、、なにしてんのよーーーーー」

「絵理子さん、ウンチは・・・ついていなみたいね。うふふ、、、穴の奥のお〜〜くまで
しっかりと見てあげるわ」

真理によって充分に広げられた絵理子の肛門を、今度は由香里が指先でグイっと
中心の穴をむき出しにする。

「ねえ、どうかしら。本当にウンコついてない。しっかり見てあげて」

「ついてるわけないでしょうがぁぁーーーーー、、もう、やめてーーーー」
やめてーーーー」

「そうね、、、奥様の言う通り、、ウンチは、、一応、拭いてはいるみたいね」

自分の肛門が仕返しの対象となり、その行動はどんどんエスカレートしている事に
恐怖・羞恥を感じた絵理子であったが、身動きが全くとれない状況であれば
ただひたすら耐える事しか出来なかった。

「ねえ、匂いはどうかな。少し嗅いでみようかな」

「あんた達、ふざけないでーーー、、そんなバカな事、、
やめて、、やめなさいよーーー」

「クッサーーー、、何、この女。あんた何が今日はウンコしていないよ。
今日、ぶっといウンコしたでしょう」

「こんな、、こんな事って、、信じられないわーーーー、、なんでこの私が、、、」

「ふん、まだ上品ぶっているの。人前で恥じらいもなくケツの穴出してさあ、」

「それにしても本当に汚い肛門ね〜〜、、うっわ〜〜〜、、すっごい匂いだし
きったないわねーーー。ねえ、奥様。あんたのケツの穴、ギョウチュウが
いるんじゃないの」

「プ、、アハハハ、、ギョウチュウって、、、真理ったら面白い事言うわね〜〜。
アハハ、セレブ婦人よ〜。いくらなんでも、それはないんじゃない。
アハハハ、、でも愉快ね〜〜」

散々に侮辱される中、絵理子は必死に耐えるしかないと思い
歯を食いしばっていたが、自分の肛門にギョウチュウがいると言われた事は
我慢する事が出来ず、その発言をした真理を睨み返すと
「あなたのほうこそ、いるんじゃない」っと怒りを込めた口調で言い
返してしまった。

「あら、なにか言った。奥様。ねえ、もう一回言ってくれない」

真理は絵理子の正面に行くと両手でホホを掴みグイっと力を入れる。

「いた、、ちょっとーーーー、、なにするのよーー、、痛い、、、痛いってばーー」

「ねえ、今このお口からふざけた事を言わなかった。ねえ、なんて言った」

「ちょ、、ちょっと痛い、、やめて、、あなた達、こんな事して、、、ここまでして、、
どうゆうつもりよーー」

「ねえ、今そんな話はしていないわ。私の肛門にギュウチュウがいるですって。
確かにそう言ったわよね」

「いたい、、ちょっと、、言葉のアヤでしょーーー、、ちょっとーーー」

「ねえ、奥様。私、あなたの多少の抵抗は嫌いじゃないけど、物には限度って
ものがあるわ。ねえ、誰の肛門の事を言ったの」

「・・・・もういいでしょ、、許して、、」

「いいわけないでしょーーー、、」

真里は凄まじい形相で絵理子を怒鳴ると、無防備な尻をバジバシと叩き始めた。

「イタ、イーーーー、、いや、、イタイ、、イタイ、、、イタイーーーー
待って、、こんな、、いっつ、、痛い、、もうやめて、、やめてーーー」

「このクソ女。ケツの穴を丸出しにして誰に物を言ってんのよ。

あんた分かっているの。え、、どうなのよーー」

「、、わかったわよーーー、、謝るわーーー、、もうやめてーーーー」

「謝って済むわけないでしょうがーーー、、」

「いやぁぁぁーーーー、、わかったわよ。撤回するわーーー、、さっきのは
間違いよ。それでいいんでしょーーー」

「じゃあ、奥様のケツの穴にはギョウチュウがいるのね。そうでしょう」

「、、、いるわ、、そう言えば満足なんでしょう」

「一応なんか言う女ね。一言多いのよ」

「アハハ、、絵理子さんは上品でセレブ夫人なのに、不潔ね〜〜。お尻の穴に
虫がいるのね。アハハ、、愉快だわ〜〜」

「じゃあ、検査しましょうか。奥様のケツの穴にギョウチュウがいるんなら
放っておけないわね。ギョウチュウ検査してあげるわ」

そう言うと真理はどこからセロハンテープを持ち出していた。

「減らず口を治すためにも本当はガムテープの方が効果があって、いいんだけどね」

「それでどうするのよ、真理」

「子供の頃に学校でギョウチュウ検査ってあったでしょう。肛門にシールを貼って虫が
いるか調べるやつよ。このセロハンを奥様の肛門にしっかりと貼って、検査して
あげるのよ」

「あったわね、そうゆう検査。アハハ、、それをセレブの絵理子さんにやるの。
すごい発想ね〜〜。でも面白そうだわ」

絵理子はセロハンテープで何をされるのか理解した瞬間、表情が見る見る内に強張り、
首を左右に振りだす。

立派な大人が肛門を曝け出し、そこにギョウチュウ検査と称し遊び半分で
セロハンテームを貼られる。「どこまで恥を、、」っと込み上げる怒りを必死に抑える
絵理子であった。

「ガムテープでやるとね、粘着が強いからケツ毛まで根こそぎむしり取ってやれるわ。
昔、奴隷の男にした事があるのよ」

「わぁお、、でも相当、痛いんじゃないの」

「そりゃあ、そうよ。肛門がヒリヒリするくらい痛いわよ。良かったわね、絵理子さん。
セロハンテープで」

そんな真理の質問に答えることなく、ワナワナとただ震えている絵理子に向かって、
真理は尻を激しく平手打ちするのだった。

「あ、、。っつ、、痛いーー、、」

「痛いじゃないでしょーー、、なに黙ってんのよ。あんたがそういう態度とるならガムテープでギョウチュウ検査してやろうか。大人でも泣き叫ぶくらい痛いわよ」

「ひ、、や、、やめてーーーー、、」

「そうよね。絵理子さん。私をあんまり怒らせないでね。じゃあ、始めようかな」

バリパリっとセロハンテープを剥がし、その音が部屋中に響き渡る。
真里は剥がしたセロハンテープの粘着面を絵理子の肛門に押し当てると、指先で力を入れ
肛門皮膚にしっかりと密着させる。

「うう、、ぐう、、ぅぅ」っと絵理子の苦痛の声を漏れ出す。

「どう、ギョウチュウ検査の感想わ。あんたみたいな汚い肛門は、しっかりと
検査しないとね」

真理はそう言うと、セロハンテープをゆっくりと剥がしていく。テープが剥がれると同時に肛門皮膚も浮き上がる。絵理子は意味もなくギョウチュウ検査の真似事を強制させられている事に、羞恥とも痛みとも訳の分からない感覚にただ耐えるしかなかった。

「ねえ、それ私もやらせてよ」

続いて由香里も同じようにセロハンテープを絵理子の肛門に押し当てると、一気に剥ぎ取る。
「キャァァァーーー」っと、強い刺激に驚いた絵理子は悲鳴を上げ、後ろを振り返り
由香里を鋭い目付きで睨みつける。

「あら、痛かったかしら。ごめんね、絵理子さん。ウフフ、、今ままで偉そうなあなたを
思い出すと、つい力が入っちゃったわ」

肛門から剥ぎ取ったセロハンテープには、うっすらと肛門皮膚を示すような痕跡を
確認する事が出来た。真理はそのテープの匂いをクンクンと嗅いでみると、強烈な肛門匂
に顔を歪める。

「くっさーー、、すごい匂いよ。この女の肛門どうなっているのよ。あんた毎日、
洗っているの」

「許せない、、」絵理子はその気持ちが膨らみ続け、今にも押しつぶされそうな自分を
必死い抑えていた。

「さあて、さっき生意気な事を言った、奥様のお上品なお口にお仕置きしようかな〜〜」

真理は肛門臭がするセロハンテープを絵理子の口元に持っていく。絵理子は目の前に
セロハンを見せつけられ羞恥のあまり顔を背けたが、由香里が両手で顔を掴みすぐに
元に戻させる。

「ねえ、絵理子さん。お口あ〜〜んして。さあ、早く」

「何、、何、何するのよーー」

「この肛門に貼り付けたセロハンテープを、奥様の上品なお口に入れてあげようと思って
ね」

「な、、なんですってーーーーー」

「ほら、早く口をあけなさいよ」

「いや、いあやぁぁぁーーーー、、やめて、、やめてーーーーーー」

「いやじゃないでしょう。あなたの肛門でしょ。汚くないんでしょう」

「ねえ、そのテープで口を塞いでやろうよ。減らず口を懲らしめてやるわ」

「はああぁぁーーーーー、、いやいやよ、、ちょっと、本当にやめて、、やめてーーーー、、
わかったわ、、許して、、、もう抵抗しないわーーー」

真里の突発的な意地悪な発想は脅しとしては充分すぎる程、絵理子には効果があった。
これ以上、酷い事をされない為には戦意喪失となり、素直に従う意外にないと認識する。

「ウフフ、、冗談よ。絵理子さん。でもあなたの態度によっては、容赦しないわよ」

「うう、、こんな、、悪夢よ、、こんなこと、、」

生まれて始めての屈辱で気がどうにかなりそうであった。つい先日のセレブで華やかで
あった事から思えば、今の現実は有り得ないと唇を噛み締める。

「ねえ、真理。絵理子さんも少しは反省してきているみたいだから、記念に
一緒に写真をとりたいわ。カメラお願いね」

一緒に写真、、と聞き絵理子はハっと気付く。今の体制で一緒に写真、、頭を過る
嫌な予感は的中していた。

「ねえ、由香里。奥様の綺麗なお顔は一緒じゃなくていいの」

「長年、嫌な思いをさせられてきた女の顔なんていいわ。私は絵理子さんの
お尻の穴と一緒に写真をとりたいわ」

「ハアァァァーーーー、、な、、な、、なんですってーーーーーーー」

衝撃の発言のあまり絵理子が驚き後ろを振り返ろうとした瞬間、「カシャ、、」っと
シャッター音が鳴り響く。

「やめてーーーーーーーー、、、いや、、いやよーーーーーー」

「ほら、笑って、、はいチーズ、、」

「そんなーー、、待って、、酷いわーーー、、お願いやめてーーーー」

「ねえ、由香里。絵理子さんのお尻の割れ目を開いて、肛門を左右に引き伸ばしてよ。」

由香里は込み上げる笑いを抑えながら、絵理子の尻肉を掴み強引に左右に引っ張り、
カメラ目線で笑顔を向ける。
自分の肛門と由香里が一緒に写真を撮っている。絵理子にとっては、もはや屈辱というよりも、拷問に近いものでった。

「やめなさいよーーー、、、、こんなのいくらなんでも、、、イジメの度を超えているわーーー」

絵理子の悲鳴に比例するかのように、カメラのシャッターは押されていく。

「ウフフ、、いい写真がとれたわ。すっごいエロ画像が出来たわよ」

「、、、お願い、、由香里さん。その写真、すぐに消して、、そんなものどうすのよ」

「だから記念よ。由香里さんが反省をしてくれて、私に屈服した証としてのね」

「どうでもいいから、すぐに写真を消しなさいよーーーーーー」

「あら、あら、また反抗期かしら。絵理子さ〜〜ん、いいの。そんな事を言って」

噛み締めた唇から血が滲み出そうであった。もはや何を言っても無駄なら、早くこの場から逃げ出したい。

「、、お願い、、これ解いて。今日は帰らせて、、お願い、、、」

「あら、なに言っているの。まだまだ始まったばかりよ。私の娘はね、こんな酷い事を
１年もやられたのよ」

「それと、これは別問題よーーー、、こんなの、、大人の社会じゃ犯罪よーーー」

「だったら今日の事を訴える。私は別にいいけど、あなたが困るんじゃないの。
絵理子さんの肛門が映った写真も証拠で提出する事になるわよ。アハハ、、、」

「、、こんな事をまだ続けるつもりなの。それで、、そんな事を
して満足なら、さっさと気が済むまでしなさいよ、、とにかく私は早く帰りたいわ」

「絵理子さん、そんな投げやりの態度じゃダメよ〜〜。ウフフ、、真理、絵理子さん
今度はどうしようか。面白い事ないかしら」

「さっきの続きがしたいわ。絵理子さんにはウンコしてもらう約束だったわ」

絵理子はウンコと聞き体全体に電撃が走る。出来ない事を強要し、その反応を
見てからかい苛め辱める。それは何度経験しても慣れるものではなく、絵理子は
予想以上の精神的なダメージを受けていた。

「ねえ、お願いよ。出来ないものは、、出来ないわ、、しかもこんな格好にされて、、
無理に決まっているでしょ」

「絵理子さん、私は出来る出来ないの話はしていないわ。誠意の問題よ。今、あなたの
お尻の穴は丸見えよ。排便しようと努力したのかは、肛門を見ていれば判断出来るわ」

「ウフフ、、おもっきり力めば肛門が盛り上がるわ。あなたのやる気と誠意を確かめるのは
ケツの穴の動きで分かるわ。絵理子さんの口先だけの誠意は通用しないわよ」

絵理子は眉間にシワを寄せ目を大きく開き、顔を左右に振りながら猛烈に抵抗する。
自分の肛門を他人にこれでもかと見られ、その上、排便をする為に必要となる
肛門括約筋の動きまで観察されるなど、人生で始めての事、いや、これからさき
二度と無いような凄まじい羞恥地獄である。
何よりも湧き出る感情はそんな変態行為を強制させらる事に対しての「怒り」であり、
いくら弱みを握られているとはいえ、とても出来るような事ではなかった。

「出来ないわーー、、出来るわけないしょーーー」

「あなたにはやる意外の選択肢はないと思うわよ。出来ないなんて通用

しないんじゃない」

「出来ないものは出来ないわーーー、、こんな事して一体何が
楽しいのよーーー、」

「さっき抵抗しないって言って、もう出来ないなんて言うのね。
だったら私が出来るようにしてあげるわ」

真里は冷蔵庫から氷を持ち出すと、絵理子に見せつける。

「な、なに。なによーーー」

「これ氷、見ればわかるわよね。ウフフ、、この前、私のお店でした
遊びがあってね〜〜
この冷たい氷をね、奴隷のお尻の穴にグリグリと押し付けるとね、
ヒイヒイ言って悶えたわ〜。」

「アハハハ　それいいわね〜〜　絵理子さんはケツに火が付かないと
何も出来ない子だから、丁度いいわね」

「ふ、ふ、ふ、ふざけないでーーー　」

「あら、私にそんな言葉使いしていいのかしらね〜　ウフフ、お・く・さ・ま」

「ギャァァァアアアアアーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」

絵理子の肛門に氷が当てられグリグリと押し付けられる。冷たさとも、痛みとも
思えるような信じられないような刺激に、取り乱し悲鳴をあげるのだった。

「いやぁーー　ちょっとーーーー　やめてーー　　いやよーーー、いやーーー」

「このままケツの穴に氷を突っ込んでやろうか。え〜〜〜　このクソ女」

「あふ、、あああ、、いや〜〜〜　いっつ　痛い、痛いわーーー　ちょっとやめて
お願い〜〜」

「どう、絵理子さん。考え直してくれらかしら」

真理は一旦氷を離すと、肛門に密着させた部分をクンクンと臭い、わざとらしく
「おぇ〜〜」っとからかいながら、絵理子の前でゲラゲラ笑っている。

「ねえ、ウンコするの。しないなら、また氷を肛門に押し付けるわよ」

「いやぁああぁぁ〜〜〜　お願い　もうやめてーーーーー。　」

再び氷を絵理子の肛門に押し付けると、今度は力強くグリグリとこね回す。

「ほら、ウンコするの。どうなのよ。イヤならやめないわよ。
ケツの穴が凍傷になっても知らないわよ」

氷を肛門に押し付けられるなど、信じられない発想に絵理子は衝撃を受け
屈辱を通り越した感情で溢れていた。

「あふふ、、やめ、、やめてーー
やめてーーーーー、、お願い、、やめて、、わかったわよーーー、、
やるわ、、やるから、もうやめてーーーあああ〜〜〜」

悔しさ・惨めさからか絵理子の口元から、泣き声が漏れる。
人前で涙を流し泣く事など、まして由香里の前でなど、それだけは絵理子プライドが
許さずギリギリのところで何とか踏ん張っていた。

「あら、あら、絵理子さん。ひょっとして泣いているの。アハハ、、あの絵理子さんが
私の前で泣くの」

「ねえ、絵理子さん。泣いて誤魔化しちゃあダメ。あなたからのお願いなら、
私達の名前を言ってしっかりと頼みなさい」

「真理さん、由香里さん。ウンコします。、、これでいいんでしょ、、」

「なによ、これでいいって。あんたのウンコにどれだけの価値があるのよ。
ウンコさせて下さいって、言い直しなさい」

「真理さん、由香里さん。・・・・う、、ウンコさせて、、下さい、、うう、、ぅぅぅ」

一瞬、涙が滲みでたが絵理子は「それだけわ、、」っと思い、必死に平静を取り戻して
いた。真理・由香里は、絵理子の口から「ウンコ」と言わせた事に、とりあえずは
満足したのか、お互いの顔を見てニヤニヤと笑みを浮かべている。
それから３人は沈黙のまま少し時間が流れる。その間、絵理子はウンコをすると宣言した
ものの、その真似事とはいえ、どうしていいのか分からずに時間だけが経過していった。

「ねえ、いつまで待たせるの。あんたやる気あるの」

「あんたまた口先だけなの。また氷をケツの穴に突っ込まれたいの」

「そんな事言われても、、こんな体制で、、どうすれば、、」

慣れない体勢と人前で肛門を出した状態で、しかも排便欲求が無い体調で
出来るはずもなかった。誠意を見せろといわれたものの、そのやる気を肛門を
見て判断と言われたもの、羞恥という感情により行動が制御されてしまう。

「あんたねぇ、ウンコするって言ったわよねーー」

「やる気を見せなさいよ。――、、ウンコする気かどうかは、肛門見ていれば
わかるわ。さっきから全然、肛門が収縮もしないし、盛り上がりもしない
わよ。あんた口だけでやる気ないでしょ」

「そんな、、私だって一生懸命に、」

パッシィィィィーーーンっと、絵里子の尻を由香里が叩く。
肛門を剥き出しにした姿勢と、排便を強制されている羞恥の中、
止めをさすような強烈な平手の痛みで絵理子の理性は
飛んでしまいそうであった。

「なにが一生懸命よ。あんたいい加減にしなさいよーーー。
真理、奥様のケツの穴に指を突っ込んで刺激したほうが、
出るかもしれないわ」

その耳を疑うような言葉は絵理子を正気に戻す。
肛門に指ですって、、その言葉を聞き顔を青ざめるが屈辱を感じる暇はなく、
真理は人差し指を肛門にピッタリと密着させると、クネクネと動かし
少し力を入れて押し込むようにし、肛門内に入り込もうとする動きを行う。

「キャヤヤヤヤヤヤァァァァーーーーーー、、、何しているのよーー」

「何って、奥様のお尻の穴を触っているのよ。旦那にも触られるでしょう」

「ば、、バカな事言わないでーー、、人に触られるような場所じゃないわーー
やめなさい、、今すぐにやめなさいよーー」

真理は絵理子の肛門に当てた指を鼻に持っていき、クンクンと嗅ぎ出す。

「オェェェーーー、、クッサーーーーー、、あんたちゃんと洗っているの。
何がセレブよ」

「、、、そこは、誰だって、、臭くて当たり前じゃないの―――。」

「あら、開き直って、なに言ってんのよ。普通の人よりも相当、くっさ〜〜いわよ。
自分で臭ってみたら」

真理は絵理子の鼻に指を持っていき臭いを嗅がせようとする。自分の肛門の臭いを
強制的に嗅がせられるなど、正気の沙汰ではない。

「やめてーーーーー、、そんな、、不潔よ。やめてーーー」

「不潔って、あんたの肛門でしょうーー。何言ってのよ」

「ねえ、絵理子さん、。ウンコ。まだなの。早くして」

「やる気がないなら、今度はこのボールペンでも突っ込んでみようかな」

真理は机の上に置いてあるボールペンを持つと、その先端を肛門の穴に密着させ
穴の奥に押し込むように少しずつ力を加えていく。

「やめてーーーー、、わかった、、だからそんな事はやめてーーーー」

自分の体の内部に異物を侵入させられるなど始めての経験であり、それが得体の
知れないものであれば恐怖感は凄まじいものであった。
観念した絵里子は背に腹を変えられない思いで必死になり、肛門に力を入れて
気張るのだった。それは自然と肛門にも伝わり、「う、、んふ、、んふ、、」っと掛け声と
同時、肛門が内部から外に向かって収縮運動を始めた。

「アハハ、、そうよ。絵里子さん。やる気が伝わってきたわ。その調子よ。ほら、
もっと頑張って」

「プププ、、アハハハーーー、、無様ね。最低――。いい気味ね～～、、お高くとまっていた
勘違い女が、ケツの穴を広げて傑作だわ～～」

「いやぁぁ、、お願い、、笑わないで、、見ないで、、ああ、、いやーーー」

「ほら、もっと、もっと頑張りなさい」

「もういいでしょ、、もうこれで終わりにしてーー」

「なに言ってのよ。まだ始まったばかりでしょ。ほら、もっと頑張って続けなさい」

「ううう、、んふ、、んふ、、んふ、、」

気張れば気張る程、その努力は肛門に現れ真理・由香里はゲラゲラと笑いものにして
満足はするが、絵理子にとってみれば耳たぶまで真っ赤になる程の屈辱感であった。

「うう、ううううう、、」

「わあ、、すごいわね。ケツの穴から何か飛び出てきそうな勢いね」

「奥様、やれば出来るじゃないの。何かを必死になってやった事なんで、始めて
じゃないの。アハハ」

真理は絵理子の肛門を間近で見ようと顔を近づけた瞬間、絵理子の肛門から
「―プゥゥゥゥーー」っと、恥ずかしい放屁音が派手に鳴り響いいた。

「なに、なに。この女、人前でオナラしたわよ。信じられないわーー」

羞恥で気が狂いそうな絵里子は必死で耐え抜こうと、溢れる感情を必死になって
押し殺している。
人前で放屁など、しかも同じ同姓、まして見下していた女達に肛門からオナラが出る瞬間
まで見せるなど、おそらくはこれからので生涯ありえない痴態であろう。
「なぜ自分がこんな目に」その気持ちは膨れ上がり、さらに自分の意思ではない「オラナ」
の放出と「由香里・真理」にバカされ笑いもにされてきた事を思い浮かべると、
今にも全てが吹っ切れそうになっていたが、死に物狂いで耐えていた。

「最低ね、こに女。誰に向かって屁をしたか分かっているの。私もろに、この女のオナラ
を嗅いだわよ。くっさ〜〜いわね。あんた、人様の顔に向かって、汚い屁を
かましてどうゆうつもり」

「うう、、こんな、、こと、、って、、あああ、、」

顔を伏せ真っ赤な顔で独り言を言う絵理子。肛門を間近で監視され、排便をする意思が
伝わるまで許さないと言われれば、力の限り本気やるしかない。その結果、放屁が
出る事は自然の成り行きである事は当然である。

「ねえ、どうしてくれるのよ。黙っていたんじゃ分からないわよ。何か言う事ないの」

「仕方ないでしょーーー、、こっちだてやりたくて、、出したわけじゃないわーー
自然の事じゃないの。そんな事まで、、辱めないでよーーー」

「なに被害者ぶってんの。こっちは、奥様の汚くて臭いオナラを嗅がされたのよ。
どうしてくれるのよ」

「、、、ひ、、酷い、、、なんて言い草なの。私はセレブ婦人よーー、、セレブよーー
こんな事をされて、、なんでこんな惨めな思いをしなきゃいけないのよーーー」

「なに言ってのよ、この女。ねえ、私はSMの嬢王様よ。今の奥様の
立場は奴隷と一緒よね。その奴隷が誰に向かって屁をかましたのよ。しかも
謝罪の言葉もなしとは呆れて物が言えないわ」

「はあぁぁぁーーー、、ど、、ど、、奴隷ですってーー、、奴隷って私の事なのーー」
なんで私が奴隷なのよーーー」

「あら、自覚がないの。見てみないさいよ、あんたの無様な格好。縛られてケツの穴を
丸出しにして SM で言えば奴隷そのものよ。それなのに、なにがセレブよ。馬鹿じゃない
の」

「そ、、そこまで、、私に、、そこまでの事言うの」

「ねえ、絵理子さん。オナラをした事は事実なんだから、真理に謝ったほうがいいわよ。
子供の頃、悪い事をしたら謝るって習ったでしょう」

「何で私が謝るのよー　不可抗力じゃいないのーーー、、排便の真似事を本気ですれば、
当然の結果よーーー」

「この女、謝りもしないで開き直ったわ。あんた、ひょっとしてワザと屁を
こいたんじゃないでしょうね」

「いい加減にしてーーーーー、、、　もうこれ解いてーーーー
こんなの、、なんで、私がこんな目に合わないといけないのよーーーー」

「反省どころか自分を正当化しだしたわ。由香里、奥様に仕返ししてもいい。
このままじゃ、私の気が収まらないわ」

由香里が傍らでうなずいた瞬間、「パッシーン」っと、真理の平手打ちが
絵理子の尻に向かって、振り下ろされる。
絵理子は尻に感じる痛みに反応する余裕はなく、顔を床に伏せ、溢れでそうな涙を
堪えている。
羞恥で気がおかしくなりそうな位の精神的ダメージを受けいてるが、そんな絵理子の
無防備な尻に向かって、数回、真理の平手が襲う。

「、、、っつ、、やめなさいよーーーー、、いい加減にしてーーー」

「やめてじゃないでしょ。人様に屁をかまして、「すみません」って謝る事も出来ないの」

「わざとじゃないって言ってるでしょ～～～」

「絵理子さん。私はウンコしろって言ったのに、なんで屁をするのよ。
あんたねえ、ふざけているの。えーーー、どうなのよ」

パッシーンっと、強烈な平手打ちを尻に受ける絵理子。ここに来て数々の信じられないような侮辱の仕打ちに惨めさや悲しさよりも、怒りの感情の方が遥かに勝っていた。
「もうやめてーーー、、やめなさいよーーー」っと絵理子は怒り任せ怒鳴るように
叫び続ける。

「全く、この女。そんなに堂々とケツの穴をさらけ出して、よくオナラまで
出来るわね。恥ずかしくないの」

「本当ね〜〜、、、肛門が盛り上がったと思うと「プウウゥゥ〜」だって。
なにがセレブよ。人前で大きなオナラまでして、恥ずかしくないの」

「お願い、、もう、、終わりにして、、お願い」

「それは駄目よ。娘は一年以上、苛められたのよ。これぐらいの事で終わる訳ないでしょ」

「ねえ、由香里。私、納得いかないわ。なんで、この女から汚い屁を嗅がせられないと
いけないの」

「だったら、やり返せばいいじゃない。いつも、お店で奴隷にしているでしょ」

「そうね、それがいいわね。」

絵里子は真理・由香里によって、うつ伏せで縛られた状態から仰向けに寝せられる。
そして、、、
真理が絵里子の顔の真上に跨り下着を脱ぐと、そのまましゃがみ込んでしまった。
絵里子の目の前に、真理の肛門がはっきりと現れた。

「はあーーー、なに、、いあやーー、、きゃあやややーーーーー、、なに、なにしている
のよーーー、、」

ついさっきまで放心状態であった絵理子は、突然、息を吹き返した魚のようにバタつく。

「何って、見てのとおりよ。さっき奥様にされた事のお返しよ」

そして、真理はそのまま絵里子の顔面に狙いを定めると、体重を落とし座り込むのだった。
真理の開ききった肛門が落下した顔面部位は、絵理子のオデコであった。
真理は肛門の穴が絵里子のオデコ中央にピッタリと密着したのを確認すると、肛門に
力を入れてキュ、キュっと収縮運動を行った。
その粘り気のある肛門皮膚が開閉する度に、絵里子のオデコの皮膚はその奇妙な感覚を
伝え、「自分のオデコに他人の肛門がピッタリと密着している」っと、信じられない
事実を認識するのであった。

「キャヤヤヤヤヤヤヤーーーーー、、なにしているのーーーー、、」

「アハハ、、ほら化粧代わりよ。私のケツの穴を擦り付けて、ファンデーションしてあげる。
アハハ、、」

「ふ、、ふさけるなーーーー、、、やめて、、、——、、汚い、、あんたいい加減に
しなさいよーーー」

「なに「ふざけるなー」って誰に物を言っているの。反省の色が全く無いわね。
あんたみたいな腐った女の顔なんて、私のケツの穴で充分よ」

「やめて、、————、、汚い、、汚いわーーー、、不潔よーーーーー、、」

「アハハ、、ねえ、真理。私にもやらせてよ」

由香里とチェンジするため、真理は一旦、立ち上がる。その瞬間、オデコから肛門が
開放されたが、今起こった事がショックで放心状態となる絵里子だった。
しかし、休む暇なく続いて由香里が跨り、そのまま絵理子の顔面にしゃがみ込んだ。
真理に続き由香里のポッカリと開いた肛門の中心の穴が的として選んだ場所は、
なんと絵里子の鼻の頭であった。
由香里は鼻の頭に肛門がピッタリと密着した事を確認すると、「えい」っと掛け声と同時に
キュ、、っと肛門に力を入れ絵里子の鼻の頭を肛門内部に包み込んでしまった。
突然の出来事の事と、ついさっきの精神的ショックから回復していない無防備な状態の為、
絵里子は由香里の肛門陵辱を抵抗する事なく受けいれてしまった。
「自分の鼻先が他人の肛門に埋まっている」、、その認識よりもまず先に訪れた事は

当然の事、激しい肛門臭、強烈な便臭であった。
絵里子はまるで「サキイカの強烈な臭い」「何かの腐った臭い」、、など脳裏で過去の記憶と、
今その瞬間感じた臭いを比較していたが、それよりもその原因を探り理解すると
体全体に電撃が走るような羞恥・苦痛にむしばられた。

「キャヤヤヤヤーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー、、
なに、、なに、、ウソ、、ウソよーーーーーーーーーーーー、、なに、、ウソでしょ。こんな事、、
ウソ、、、信じられないわーーー、、人の顔に、、そんな、、う、、オエェェェェ、、、、、」

激しい怒りと羞恥の後、強烈な肛門臭がもたらした嘔吐感にも襲われていた。

「なに、オェェって。そんなに汚くなわよ。今日だってウンコした後、ちゃんと拭いたし。
肛門にウンコのカスが残ってなんていないでしょ。」

「やめてーーーーーー、、不潔、、不潔よーーこんな、、いやーーーー、、」

「アハハ、、由香里ったら、セレブ婦人に失礼よ。もっと丁重に扱ってあげないと。
きっと他人のお尻の穴なんて一度も臭った事ないわよ」

顔を激しく動かし口元から抵抗の言葉を発している絵里子であったが、今だに鼻の頭は由
香里の肛門に密着している為、モゴモゴと言葉にはならない。

「ねえ、由香里。チェンジして。面白い事思いついたわ」

真理はそう言うと再び絵理子に跨り、下半身側に体の向きを変えて、尻を突き出す。
その格好は、真里の陰部が絵里子のアゴに当たり、肛門と鼻の両穴が数センチの距離と
なる程、密着していた。

「キヤヤヤーーーー、、もういや、、やめなさいーーーー、、こんなの人権侵害よーー
あなた達、犯罪もいいところだわーーー、、こんな事までされる覚えはないわよーー」

さっきよりもさらに強烈な肛門臭を強制的に嗅がされて、耐え切れない絵里子は
鼻の呼吸を止めるが、口も陰部によって呼吸を妨げられている為、肛門臭を我慢しながら
も、呼吸するしかなかった。

「やめ、、く、、いや、、臭い、、待って、、やめてーーーー、、臭い、、くさいわーーー
ふざけないでーーーー、、あんた達、、もう許さない、、絶対に許さないわーーー」

「あらら、また反抗的になってきたわね。やっぱり反省は口先だけね。ウフフ、、
絵理子さん、今からいい事してあげるわ」

真理は満足気にそう言うと腹部に力を入れ気張り出す。絵理子はそれが何を意味
すのかは興味がなく、ただ「この二人は絶対に許さない」と真っ赤な顔をして
バタつく事で必死であった。
そして、真理の肛門が一瞬大きく膨らみだしたかと思うと「ブゥゥゥゥーー」っと
大きなオナラが肛門から放出してしまった。

「アハハ、、いい気味。どうだった私のオナラ、、屁わ。ジャスミンの香りしたでしょ」

臭いを感知する器官である鼻と、人間の体の中で最も細菌が多く、又、汚れた場所である
肛門とゼロ距離の為、オナラの空気の振動とその後、訪れた香りは絵里子の精神を
ボロボロにむしばんだ。
「ひどい、、、あああああ〜〜〜」っと泣き声混じりの事を出し、屈辱と羞恥で真っ赤な顔で
悶えるのだった。

「あら、絵理子さん泣いているの。さっき私達に向かって、同じようにオナラしたじゃな
いの。そのお返しよ。
あんた上品ぶっているけど、真理の屁よりもよっぽど臭かったわよ。外見は見た目が良く
ても中身は腐っている、、まさに人間がそのまま現れているわ」

その言葉が引き金となり絵里子が今まで必死に我慢し抑制してきた怒りの感情が、
一気に爆発した。
それは理性などで押さえ込む事など出来るような生易しいものではなかった。
「イジメの裁判」、、「不倫」それは絵里子にとって都合が悪い事ではあったが、売春女と
見下していた女の肛門の臭いを無理矢理嗅がされ、しかも顔面の鼻に向かって肛門を密着
した状態で、屁まで嗅がされた事を思うと、弱みを握られている事など、どうでもよくな
っていた。不倫・イジメの事など言いようによっては、いくらでも逃れられる。
又、金の力を使えば証拠隠滅も可能であるし、その他の手を打てば何とでもなる問題と
認識し、今までのウップンを晴らそうと反撃にでる絵理子であった。

「もう限界よーーーーー、、これ解いてーーーー、、裁判でも何でもしなさい

よーーーー」

怒り狂った絵里子は凄まじい目付きと大声で叫び、言い放つのだった。

「あらら、奥様。どうしたのよ。そんな事言って、本当にいいのかしら」

「いいわよ。裁判でも何でもしないさよーーー、、望むところよ。こんな思いをする位なら、優秀な弁護士を雇って証拠隠滅して、とことんやりあってやるわーー」

由香里・真理は、絵里子の取り乱しに対して特に反論する訳でもなく、落ち着いた様子で冷静に見つめた後、絵里子の要求通りに拘束具を外して開放するのだった。

「いいわよ。絵里子さん。好きにしなさいよ」

拘束から開放され、脱がされた下着とズボンを履くと、まずは駆け足で洗面所に向かい
肛門を擦り付けられた顔をタオルで拭く。
その後、凄まじい形相で振り返り、由香里・真理を睨み付けると、二人に向かっていき
ホホに強烈なビンタを繰り出した。
パッシーンっと、ホホを叩く音が響く。

「よくも、、よくもあんな事を、、恥ずかしくないの、、いい大人が、、
このバカ女どもが――――、、、あんた達みたいに下等な人間から辱められる
筋合いはないわ」

ホホを叩かれた二人は、以外にも冷静さを保っている。お互いの顔を見つめ、ニヤニヤと笑みを浮かべている。裁判・不倫写真という脅しが通じなくなったにも関わらず、その余裕な態度に一瞬恐怖と不安を感じた絵里子であったが、「もうこの場から解放される」っと思えばそんな事は関係ないと思い、ホテルのドアに向かい歩き出した。

「あら、帰るの。本当にいいのかな〜〜、、ウフフ、、じゃあ、不倫の事を旦那に
話してもいいのね」

由香里の言葉に足を止め振り返る絵理子であったが、つきさっきまでの弱気な態度ではなく、このホテルで受けた数々の屈辱を晴らすような目付きで、由香里を見返す。

「好きにしなさいよ。あんな写真、何とでも言い訳を作るわ。私が不倫したなんて

言い掛かりも良いところよ」

「へえーー、、不倫していないの」

「ふざけないで、デタラメはやめて。そんな証拠がどこにあるのよ」

あら、シラをきるのね。流石、根性が腐った女だけはあるわ。でも悪い事をすれば必ず罰が当たるものよ。ウフフ、、浮気なんてバレたら旦那様は許してくれるかしらね」

絵里子の浮気は事実であった。なに不自由ない優雅な生活の中、物足りない事はただ一つ「刺激がほしい」という単純なものであった。

「本当、あんた達と話すと気分悪いわ。だったら今すぐに不倫相手の男を連れてくるか、決定的な証拠を見せなさいよーー　大した証拠もないくせに適当な事を言わないでよ」

さっきとは立場が逆転し、今度は絵理子が由香里・真理に罵声を飛ばし、ものすごい勢いで問い詰める。
由香里・真理と同じ立場となった今、今までの屈辱を晴らすような喋り方である。

「ウフフ、それがね、あるのよ。すご〜い証拠が」

その言葉を聞いた瞬間、絵理子は一瞬、天国から地獄に落とされたような気分となる。
つきさっき由香里・真理にビンタを喰らわせ啖呵を切った絵里子にとって、今更、引き下がる訳にはいかない。そんな事をすれば、どうゆう話の流れになるかは想像出来、又、その先の事は凄まじい地獄絵図となるであろう。
そして、何よりも「もし浮気が夫にバレたら、、」っと想像すると、何もかも全てが崩壊してしまう。「今まで順調で進んできた人生が」、、その事を思うと何としてもこの場を、どんな手段を使っても切り抜けるしか、残された道はなかった。

「なに証拠って。ふざけないで、、、どうせ脅しでしょ。だったらさっさと見せなさいよ。このウソ付き女――」

「あら、今度は私達がウソつき呼ばわりされたわ。さっきから酷いわね。絵里子さんのようにお金はなくても、真っ当に生きたつもりよ。それをウソつきだなんて」

「ふざけないでーーー、、どうせ大した証拠なんてないでしょ。あんた達、ゲセンな女が何を言っても世間は認めないわ。夫も私の言葉を信用するに決まっているわーー」

強気な姿勢を続ける絵理子であったが、内心では「本当に別の何かを切り札として持っているのか」「すごい証拠とは何か」など、序所に不安が大きくなる。

「奥様、やっぱり不倫はいけないわよ。奥様の事を思っていってあげるのよ」

「そうよ。エリートの旦那様がいながら不倫なんて、なにが納得いかないの」

「だ、、だから、、私は不倫なんてしてないわ。さっきから何度同じ事を言えばわかるの」
証拠もないくせに、ふざけないでーー」

「へえーー、そんなに自信があるのね。、、じゃあ、もし奥様がウソついていたらどうするのよ。私達ウソ付き呼ばわりされて、ビンタまでされて、どうしてくれるの」

「・・・なんでも好きにすればいいわよ。でも例え本当に私が浮気していたとしても、、そんなもの、証明する事なんて出来るわけないわ。
あんた達が何を言おうが、何を持ち出そうが、、よほど決定的な証拠がない限り通用しないわよーー」

「そうなの。好きにしていいのね。ウフフ、、楽しみねーー」

「どんな事でもするのね。ウソじゃないでしょうね」

「ウソじゃないわー　し、しつこいわよ――、、その代わり、証拠がなければ、こっちが名誉毀損で訴えるわ。覚悟しなさいよーー。」

「そう、わかったわ。その時は私達も覚悟するわよ。ウフフ、、でも、もし浮気が本当で旦那にバレたら奥様は大変ね。アハハ、、想像しただけで同情しちゃうわ。薔薇色の人生から一気に転落ね〜〜」

「あんたからそんな事を心配される筋合いはないわーー」

由香里のその言葉は図星であり、絵里子の不安を一気に増幅させる。

「もしバレたら」、、そんなあってはならいな事を想像するとゾっとする。
「でももし、、万が一バレたら、、本当に決定的な証拠も持っていれば、、、」さまざま思考が交錯する中、最悪の事態にならない事だけをただ祈る事しか出来なかった。

「ねえ、本当に浮気はウソじゃないの。今、正直に言えば許してあげるわよ。」

「ここまで言い切って、もし浮気していたら本当に許さないからね。あんたその時は口先だけじゃなくて、本当に覚悟出来ているんでしょうね。謝るのなら今のうちよ」

「何回同じ事を言わせるのーーー、、いい加減にしてーー　」
立証出来るような証拠なんてないくせに、そんな言い回しはやめて」

「あらら、、強気ね奥様。ウフフ、、でも、もしウソだったら、ウフフ、、ものすご〜く
恥ずかしい事をするからね。泣いても許さないわよ」

一体何度同じ事を聞かれるのか、、もういい加減にしてほしい、、早くこの場から立ち去りたい、、その思いから絵里子はヤケクソになり、宣言するのだった。

「ウソなら裸になって土下座でも何でもしてやるわーー、、煮るなり焼くなり
好きにしなさいよ。
だから、さっさと証拠を出しなさいよーー」

**「そう、わかったわ。でももしウソだったら、奥さんのお尻の穴に浣腸して、肛門から汚い
ウンコを無理矢理、出させるわ」**

「‥‥え、、、な、、なに、、なんですって、、かん、ちょうって、、」

突然の聞きなれない言葉に戸惑う絵里子であった。

「あら聞こえなかった。浣腸よ。浣腸。お尻の穴から薬を入れて無理矢理ウンチを出させるのよ。
ウフフ、ウンチだけじゃないわよ。オナラもブーブーってでるわよ。恥ずかしいわよ。浣腸よ」

「な、、なんですって、、」

「うふふ、あまり理解できていないみたね。もう一回説明してあげる。奥さんのお尻の穴、肛門よ

肛門。わかる、こ・う・も・ん。その肛門をおもいっきり左右に拡げてウンチが出てくる穴から、ブチュウゥゥ〜〜って浣腸をするのよ。
ウフフ、浣腸されたらね、ブブブって大きなオナラもでるわよ。恥ずかしわね〜〜、アハハハ、、」

「はあーーーーー、、」

目を大きく開け唖然とする絵里子は驚きのあまり、返す言葉が見つからない。

（、、か、、かんちょうって、、あの浣腸のこと、、、なの）

この女達は子供の悪ふざけから排便させるために、浣腸という医療行為まで辱めの目的で
利用しようとている。
次第に絵理子の動機が激しくなり、目の前の事態が現実とは思えない事に、ぎりぎりと
歯噛みしてプルプルと震えている。

「なに、どうしたのよ。さっきまではあんなに強気だったのに」

「冗談はやめて。呆れて物が言えないわ、、なんのつもりよ。そんな事を、、そんな下品な
冗談はやめて。大体、、そんなものを用意しているの」

「ウフフ、、それがね、用意しているのよ。ほら、これイチジク浣腸。
奥様がウンコしないって言い出した時の為に、今日持ってきているの。ウフフ、、奥様、浣腸の経験
ってあるの」

真理はイチジク浣腸を取り出すと、絵理子の目の前に持っていき、「ほ〜〜ら」っとかざし、
見せ付ける。
絵理子は見せ付けられた浣腸に嫌悪し、「ふざけないでー」っと手で浣腸を叩き落した。

セレブで優雅な生活を送り社会的な立場のある絵理子が、由香里の目の前に肛門を出し
浣腸される姿を想像すると、陽炎よりも酷い目眩を覚える。

「なにするのよ、せっかく見せてあげたのに」

「何のつもり。いい加減にしなさいよ」

「あら、さっきの続きじゃない。私達とウンコする約束をしたでしょ。でもあなたはオナラしか
していなわ。ウフフ、ねえ、絵理子さんは浣腸した事あるの」

「ふざけないでーーー、、そんな事を答える必要はないわ。さっきから下品な冗談ばかり、、」

「冗談じゃないわよ。ついさっき、ウンコが出ないって言ってたわよね。
だったら浣腸すれば出るから、丁度いいじゃないの」

「はああーーーー、、ふ、、ふ、、ふざけないでーーー、、そんな事までして排便なんて出来るわけないでしょーーー、、、」

「なに言ってるの。あんた私の娘がどんな目に合ったか知っている。下剤使ってまで排便させられたのよ。だったら奥様にも同じ経験をして頂くためにも、浣腸させてもらうわ。当然の理屈よね」

「あなた本気なの。ど、、どうゆう発想しているのよーーー、、いい歳をした大人のやる事じゃ
ないわーー
そんな事を平然と、よくも、、恥を知りなさいよーーー」

「ふん、あんたこそ何よ。子供の責任を取るって偉そうな事を言って、「ウンコが出ないから出来ない、出ないものは仕方ないですって、、」出ないなら、ケツの穴に浣腸してでもウンコを出させてやるわ。」

「もういいわーーー、、あんた達みたいな精神異常者と、これ以上は会話もしたくないわーー、、どうせ証拠がなければ私の勝ちよ。ささと出しなさいよーー」